

13

25

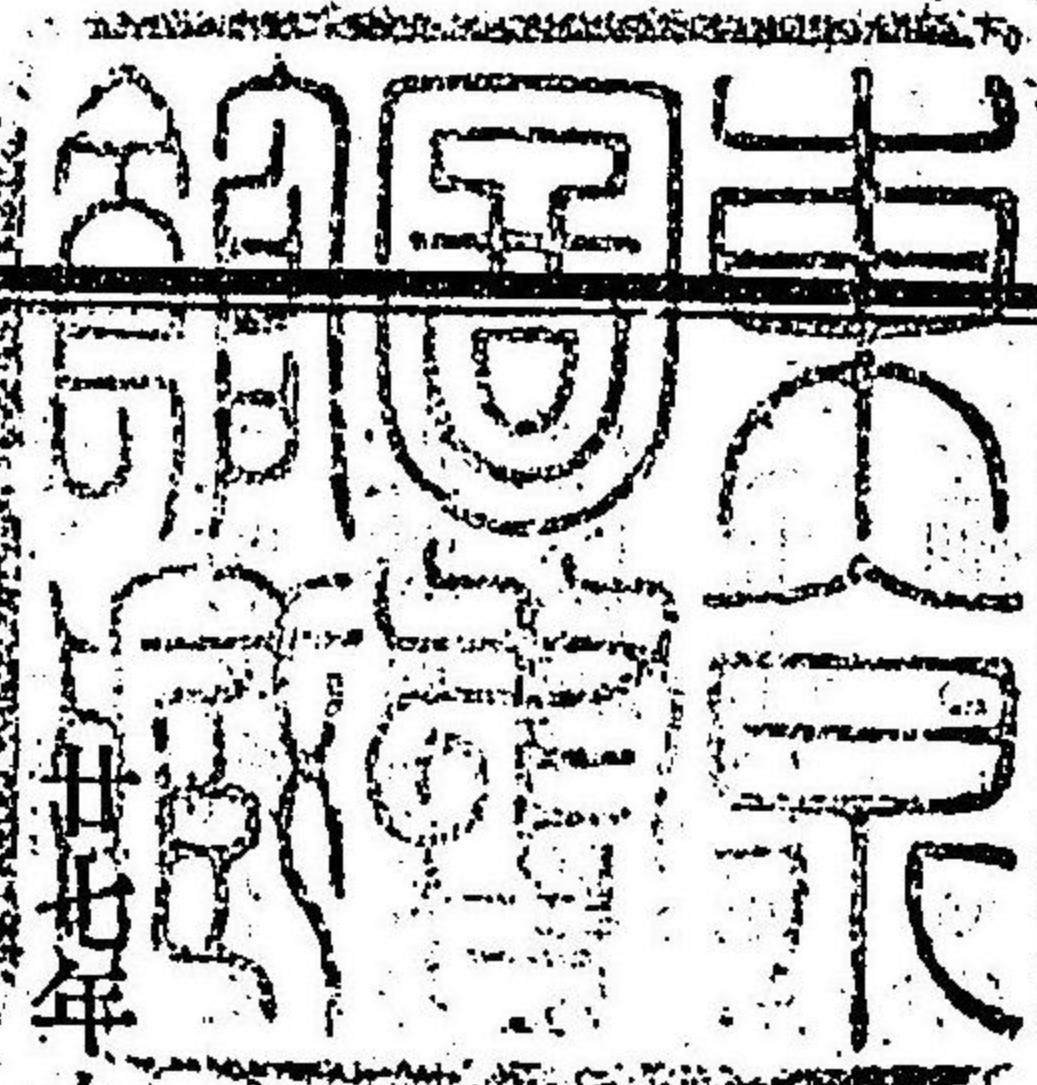
吳

服

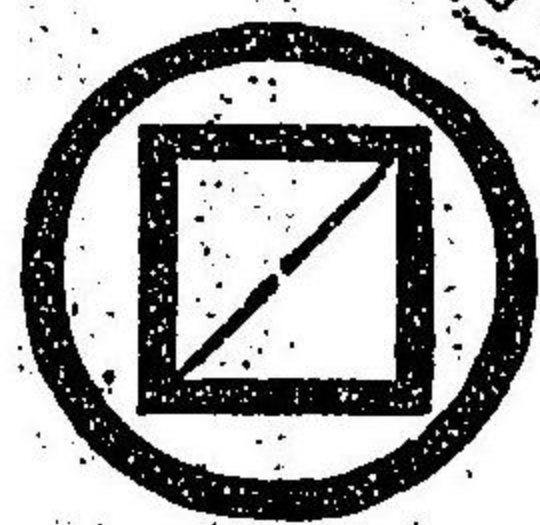


秋冷相催候處

益印 冬物相場之義日清開戦以來人氣頓に挫折の爲め意外に下落仕候へども購買者は猶今後の景況を氣遣ひ一向手出しも不仕然して製造人は原料より採算仕候ては無論不引合旁何れも織出し相扣え一時無取引同様の姿に御座候處追々何品とも必需の期と相成殊に日清戦争も報知の至る毎に日本大勝利にて人氣も稍引立ち隨て相場之處も漸次引締めの姿に御座候即ち左に成行奉申上候就ては諸品共十分出精御願可申上柄物は別して御好評を博し得られ候様夫々注意仕置候間何分不相替多々御用向被仰付度奉願上候頓首



廿七年九月



市田彌一郎

東京市日本橋區田所町廿七番地

(電話千六百九十八番)

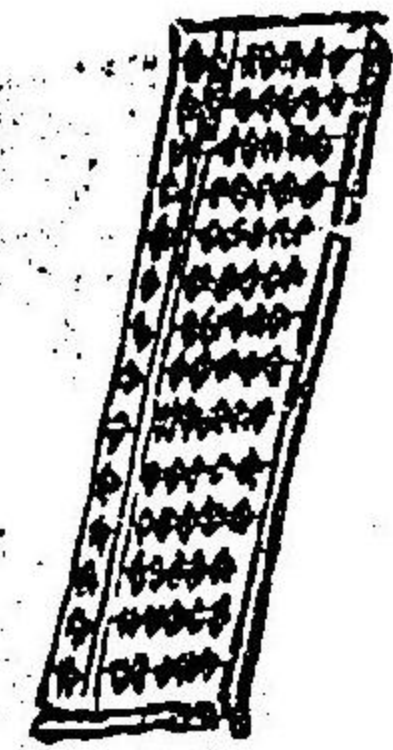
仕入店



市田彌兵衛

京都市上京區柳馬場三條上ル

眷顧各位



當時の商況に就て

金風白露時節既に秋に入て衣服の新陳代謝又將に急ならんとす
 此時に當てや機業家は孜孜其業を勉めて或は機織の足らざらんあとを憂ひ商業家は汲々其事に従ふて或は供給の及ばざらんあとを懼るゝもの是れ常年今日に於けるの例なるにあらすや
 然るに獨り本年の實況に至ては全然之に相反して當業者皆逡巡躊躇即ち所謂彼氣迷ひの色あり秋冷漸く肌膚を侵すの今日に及びて猶且つ各般の準備之に應ずるに至らす其甚しきに至りては復た休業の己むを得ざるを唱ふるは何ぞや

夫れ日清の交戦其振古未曾有の大事にして其直接間接に商工實業界に影響を及ぼしたるや素より尠少にあらざるべし從て當業者一般逡巡躊躇の状ある其偶然ならざるを知る然れども亦一方より見れば一日清事談に熱中し冷然其業を措て顧みざるの者あり古來

奉公の氣義に富める我邦人「しきしまのやまとおよろを人とは朝日よ匂ふ山櫻花」の一詠を常に愛誦するの我風俗の之を志して然らしめしものたるあと論を俟たずして明のなりと雖も抑も亦實業者の本分にあらざるなり
 大詔に曰く臣民各々其の常業を勤むるを怠らす内には益々生殖を進め以て富強の源を培ぬは朕の望む所なりを吾人實業者たるものは特に此聖旨を奉體し以て大に勉めざるべからず今

や外より捷報の頻々として至るあり内には稻作の全國を通じて豊饒なるあり四民内よ豊かにして國威外に揚る今後内地の商業豈望なしとせんや況んや一時其大打撃を受けたる當業品の價格は却て又日よ其強氣を唱ふると共に其物品の拂底を見るの今日よ於てをや
 夫れ然り然らば此際に處して徒らに氣迷ひの五里霧中に彷徨するあらんか空しく商機商略を愆まりて所謂彼「今日になつて菊作らうと思ひけり」の一嘆息に終りて又悔ふとも及ぶことなからんとす
 吾人素と急進妄動を喜ぶもれよ非ず又弁を好むものに非ず要するに當業者の漫然此好時機を失せんあとを慮はありて此に微衷を披く所以なり

京呉服相場

縮緬之類

白濱 大幅	五五三〇廻し位迄
白濱 中幅	五八〇〇廻し位迄
同 兵兒帶地	二十四圓位迄
白濱 小 幅	五五五廻し位迄
全上銘物	
天 印	六一五廻し
地 印	五九五廻し
人 印	五八〇廻し
別織白小幅光鶴印	五圓五十錢迄
白濱 鶉 三 丈	八圓五十錢位迄
白濱 絹 縮	五圓五十錢前後

(四)

白丹後 大幅	二十三圓位迄
白丹後 中幅	十七圓位迄
全兵兒 帶地	十六圓位迄
濱紡績入大巾色無地	廿八圓位迄
白丹後 小幅	三圓位迄
白丹後 縮綿	三圓前後
白 縮 大幅	六圓前後
濱 大幅色無地	廿一圓位迄
濱 中幅色無地	二十四圓位迄
濱 小幅色無地	七圓前後
丹後 大幅色無地	十二圓前後
丹後 中幅色無地	七圓五十錢位迄

全 小幅色無地	四圓五十錢位迄
丹後 縮綿色無地	二圓九十錢前後
丹後 縮綿色無地	二圓九十錢前後
色紋縮綿中幅	八圓五十錢位迄
色瀧山舞縮綿中幅	九圓三十錢位迄
鴉皮中幅色無地	七圓前後
色山舞縮綿中幅	四圓五十錢前後
色紋縮綿小幅	三圓位迄
色段縮綿小幅	二圓位迄
縮綿頭巾地	一枚分 三圓位迄

但し組合せに相成居候



(五)

②の縮緬買ふは最大急務
 見るも涼しき濱縮緬。風合吟味に熱心し新に機織を製造し。原糸の撰みは元よりも。織手の上手は特別に。「擇みて織出す天印。其又外に織立つる。キリット締りし小綴物。萬年替らぬ御愛顧を。「祈りて名づけし龜印。例の口調で相溜らん。上風澤山有馬筆。書きつくされぬ色数は。店に備へし色本の。番號多き其中で。「自由自在に御好みあれ。好みといへば頭巾地の。趣向は倍々歩を進め。句ひも高き梅の花。盛り久しき菊の花。「人は花王といふ牡丹。種々様々の花形は。いと愛らしき友染の。入りしも入らぬも押なめて。疑らぬ意匠は支那兵の。被服の紋玉見た様な。「野暮に間拔けた王風でなし。斯く迄盡す。②の。丹心愛していさやいさ。いさくいさや諸共に。正々堂々一步たも。譲らず退かず飽く迄も。ドシ〜買入れ賜ふよと「眞に各位の大急務

友仙之類

中巾縮緬友仙	八圓五十錢位迄
中巾縮緬更紗	八圓位迄
中巾縮緬上代	六圓五十錢前後
中幅縮緬板ノ	八圓位迄
中幅縮緬玉糊	八圓前後
小幅縮緬友仙	三圓八十錢位迄
紅入 寫し	品柄によりて甚しき相違あり
紅なし	
小幅縮緬帶皮及下着柄友仙	五圓前後
小幅縮緬更紗	七圓位迄
並に四丈物六丈物あり 直段は右の格合に準し御算當あるべし	
小幅縮緬玉糊	四圓五十錢位迄
七圓位迄	
小幅縮緬上代	三圓五十錢位迄
四圓位迄	

小節絹上代	全更紗	奉書紬友染	絹小紋	縮緬裾除ヶ地	縮緬襦袢袖 <small>但し組合せに相成居候</small>	友仙更紗小紋 <small>玉糊 其他新趣向物あり</small>	小幡縮緬帶揚	紋壁友仙 <small>(五丈物あり又六丈物あり)</small>	小幡縮緬臈小紋	小幡縮緬板ノ	小幅縮緬紅櫻ボカシ
三圓二十錢位迄	八圓五十錢位迄	八圓位迄	六圓位迄	二圓五十錢位迄	二圓五十錢位迄	八圓位迄	五圓位迄	十一圓位迄	八圓前後迄	四圓五十錢位迄	七圓前後迄

全紫中形及麻ノ葉	全納戸中形	全本紅入紅無	全本紅入紅無	全水元友仙	糸好絹更紗	全納戸中形	全本紅入紅無
二圓七十錢位迄	三圓前後	三圓位迄	四圓五十錢位迄	四圓位迄	五圓位迄	三圓四五十錢位迄	三圓五十錢位迄



長の歲月[㊦]が。苦辛鍛煉なしたりし。「友禪染の改良は。日に月進む文明也。光りと共に伴ひて。「見る目眩^{まよひ}き心地なり。頃しも秋の事なれば。尾花、刈萱、藤袴。萩や桔梗や女郎花。「色は様々百花園。されは優^{やさ}しき一枝も。亦美しき一株も。珍らかなるも妙なるも。其御好みに任すなり。「高尚清雅の[㊦]友仙。其又中に小紅入。鳩羽の色のボカシ染。子達向には最適當。「真に可憐のものぞかし。其外更紗や、玉糊や、帶揚、裾除ヶ、襦袢袖。妙技と今更いふも野暮。「特技とはあるも古めかし。されば倍々[㊦]の。友染類の評判は。誰不知火の果迄も。響き涉りて日々に。山なす注文受くるふそ。「真に満足慶賀の至り

欣舞々々々々
愉快々々々

絹紬之類

白本羽二重	白曾代羽二重
十七圓位迄	十三圓五十錢前後迄

平絹六丈青味張り	糸好絹白張り	小節絹白張り	白奉書紬	白當舞鶴印書	平絹猩々紅	曾代紅猩々紅	平絹本紅	平絹保險改良紅	曾代保險改良紅	加賀七丈猩々紅
二圓七十錢位迄	二圓五十錢位迄	二圓六十錢位迄	六五〇廻しより	六五〇廻しより	六〇廻しより	六〇廻しより	八〇〇廻し前後	七〇〇廻しより	六九〇廻しより	二圓前後

小節緋猩々紅	一圓六十錢前後
糸好猩々紅	二圓七十錢前後
本秩父猩々紅	三圓二十錢前後
名織本紅	四圓五十錢前後
名織猩々紅	八五廻し前後
糸好緋紅櫻ボカシ	七三〇廻し前後
小節緋紅櫻ボカシ	三圓五十錢
糸好緋彩色入紅板	五圓五十錢
小節緋彩色入紅板	三圓五十錢
小節緋紅素板	四圓五十錢
小節緋紅素板	三圓五十錢
平緋紅素板	二圓四五十錢

平緋紅二重板	四圓五十錢
加賀七丈紅素板	二圓前後
双子緋本京花	七圓前後
糸好緋本京花	八圓五十錢前後
糸好緋新花	六圓位
糸好緋地京花色	三圓二十錢
小節根古屋本京花	二圓八十錢
小節緋本京花	四圓位
小節緋新京花	六圓位
小節緋地京花色	二圓七十錢
小節緋正花色	二圓五十錢
糸好緋正花色	三圓八十錢
	四圓位

糸好緋色無地	三圓六十錢位
全無上	三圓五十錢位
太織色無地	五圓前後
繭紬色無地	二圓位
新繭紬色無地	三圓六十錢前後
紋緋色無地	一圓七八十錢位
繭紬並巾五丈六尺物	三圓八十錢位



④の絹類買ふは最大急務
 今更野暮に喋々ど。④絹類特別に。飛切名
 風稀無類。頗る付の上染と。「いふ迄もなき
 事なりかし。されども世には随分と。撰みの
 悪しき其絹を。おまけに詰らん染にして。洒

帶地之類

本錦本金欄	曲一尺 六七十錢位
大紋綴子	曲一尺 六七十錢位
糸緯縹珍廣帶	九圓前後
五斯緯縹珍廣帶	五六十圓位
糸錦廣帶	五圓五十錢前後
	十圓前後
	七圓前後
	二十圓前後

蛙々々然と御得意へ。送りて更に知らぬ顔。
 知らぬ顔して澤山よ。御買なさるゝ先もあ
 り。「眞は慷慨悲憤の至り。我は品質を。
 第一吟味し直段をば。第二に働く事にして。
 直安專一隨て。品の吟味を扱置て。御爲めも
 何んよも構はない。不深切なる事はなし。
 「あれど④商店の特色。思ふて爰に至りな
 ば。客を愛する眞誠の。商業各位は諸共よ。
 勇み進んでドンくど。④店の絹類を。飽
 迄販賣なさるゝは。「眞は各位の大急務

綿糸錦廣帶	三圓三四十錢位 六圓前後	黑南京廣帶	二圓七十錢位迄
小柳廣帶	七圓前後	緞子羽織裏地	二圓位迄
紺緞子廣帶	一圓九十錢位迄 四圓前後	緞子羽織裏別長尺六尺物	三圓八十錢位迄
新朱珍廣帶	三圓五十錢位迄 四圓五十錢位迄	小柳	五圓位迄
寶來廣帶	一圓七十錢位迄 四圓五十錢位迄	朱珍兒帶	五圓位迄
綿立寶來廣帶	七圓三十錢前後	曲尺にて尺五尺七尺八二尺柄行種々有之候	十八圓位迄
蓬萊金通廣帶	三圓三十錢前後 五圓位迄	新珠珍兒帶	二圓四十錢位迄
綿立蓬萊金通廣帶	二圓八九十錢位迄	博多兒帶	三圓四十錢位迄
白緞子廣帶	四圓五十錢位迄	新小柳兒帶	三圓六十錢位迄
白緞子九帶綿	三圓五十錢位迄	綿綾地兒帶	二圓四十錢位迄
白朱子廣帶	六圓前後	綿糸錦兒帶	三圓六十錢位迄
黑朱子廣帶	十三圓前後	朱珍九寸	七圓位迄
		小柳九寸	四圓前後

新繻珍九寸	一圓二十錢位迄	色朱子着尺	五圓位迄
新小柳九寸	二圓五十錢前後	繻珍五寸	八圓前後
瓦斯小柳九寸	一圓十錢位迄	京博多五寸改良機	三圓五十錢前後 四圓五十錢前後
紋織九寸	一圓五十錢位迄	耐久特別製唐朱子替り銀印二圓八十錢 無比都朱子九寸金印四圓十錢	四圓八十錢
新博多九寸	一圓四五十錢迄		
黑朱子九寸改良機	一圓六七十錢迄		
改色朱子九寸	二圓八十錢位迄		
別織黑南京九寸	一圓三四十錢位迄		
瓦斯朱珍三丈物	八圓五十錢迄		
綾地三丈物	九圓位迄		
糸錦三丈物	廿圓位迄		
倭錦三丈物	十圓前後		
綿金襴	九十錢位迄 八圓七十錢位迄		
島朱子三丈物	四圓前後		



柳櫻をよきませし。都の春の錦てふ。錦、金襴、朱珍、緞子。「數ある中に取りわけて。日本全國元よりも。外國迄も何處迄も。人は高尚と優美なる。「賞辭噴々朱珍織。評判よければ尙更よ。意匠を凝らす奮發に。彌々新柄織出して。春は朝日に匂ふなる。櫻の花や秋は又。千草の花の色々の。一時に咲きしに異

ならず。「眞」京都の一大美術。美術美觀の淵叢の中を奔走[㊦]は。撰みよ撰みし其品を。御得意大事と勉強し。「薄利に納むる深切物。深切物と我口で。誇るは心切ない緞子。羽織の裏の短かさよ。あれは如何よと御叱りを。受けなれ先に永尺の。六尺ものを織立て。「備え整ふ健氣さに。何んでもかんでも[㊦]と。歡迎柏手の御引立。たゞ長かれと祈りつゝ。碎心勉勵するのみの。「今日の身の上難有けれ

欣舞々々々々
愉快々々

絞縵之類

- 縮緬中巾地透絞^リ 四圓七十錢位迄
- 染分 彩色入 種々取揃 九圓位迄
- 小巾縮緬地透絞^リ 四圓前後
- 太織地透絞^リ 二圓八十錢位迄
- 糸好變り絞^リ 三圓九十錢前後迄

- 會代變り絞^リ 五圓前後迄
- 立卷結 二圓前後迄
- 太織藍三浦絞^リ 四圓五十錢前後
- 色角一枚絞^リ無金 三圓前後
- 色角一枚絞^リ金入 三圓四十錢前後
- 色角二枚絞^リ無金 二圓位
- 色角二枚絞^リ金入 二圓四五十錢位
- 色 三浦絞^リ 三圓二十錢位迄
- 色 三浦絞^リ金入 四圓
- 色鹿の子入子五ッ麻 三圓五十錢前後
- 色鹿の子六ッ麻 一圓七十錢前後
- 全上入子 三圓
- 色鹿の子七ッ麻 二圓前後
- 全上入子 三圓五十錢前後
- 色鹿の子八ッ麻 二圓三四十錢位
- 全上入子 四圓七十錢位迄
- 全上入子 二圓七十錢位迄
- 全上入子 三圓位迄

- 色鹿の子京極 三圓五十錢前後
- 全上入子 二圓二十錢位迄
- 鹿の子變り絞^リ 三圓前後
- 全上入子 二圓前後
- 色鹿の子九釜 八圓前後
- 色鹿の子十釜 九圓前後
- 色鹿の子十二釜 十四五圓位
- 段染鹿の子 二圓前後
- 金入鹿の子 三圓三四十錢前後
- 全上入子 二圓二十錢前後
- 縮鹿の子四ッ麻 七十五錢前後
- 縮鹿の子五ッ麻 一圓前後
- 縮鹿の子京極 七十錢前後
- 縮角絞^リ 七八十錢位

- 京御召縮緬 七圓五十錢前後
- 全上大柄六丈物 十三圓前後
- 別眺光貴織 九圓前後
- 京市樂御召 六圓七八十錢位
- 眺機紋織御召 十圓前後

西陣織物雜種類

鹿の子かけ、國の粹なる髮結び。
いざや止めなん束ね髪
古來、愛敬の、色鹿子、掛けて替らぬ、神の御國 大舉勤來々



全上尺五巾	六圓五十錢位迄
全上尺八巾	七圓三十錢位迄
全上二尺巾	八圓前後迄
全上二尺五寸巾	九圓四五十錢前後
全上三尺巾	十三圓五十錢前後
川俣畫絹	十四圓位迄
篩絹	廿四圓位迄
西陣小倉袴地	二圓五十錢迄
繭紬更紗座蒲團地	四圓位迄
御召島前掛地	三圓二三十錢迄
紋御召前掛地	五圓位迄
別特約 仙臺平	九十錢前後迄
	二圓位迄
	二圓七十錢迄
	五圓位迄
	一枚分
	七圓五十錢位迄
	八圓九十錢位迄
	一枚分
	一圓二十錢位迄
	一圓位迄
	六圓五十錢位迄

別特約 秋田白畝	九圓位迄
別特約 秋田八丈	十三圓位迄
別本場秩父島	二圓二十錢迄
	三圓五十錢迄
	四圓五十錢位迄
	七圓位迄



「蹶起せよ客を愛する御得意諸君
 聞ても飛立つ紋御召。見ては是非共買はず
 んば。」あるべからずの紋御召。殊に製品
 は。斬新奇抜の柄行も。高尚優美の柄行も。
 清麗瀟洒の柄行も。老若男女の向々も。「數
 は山なす如くなり。而して御爲を第一と。注
 意なしたる殊勝さは。買つて用ひて知り賜
 へ。「眞に溜らん」紋御召。流を汲みし華紋
 織。御召、一樂、光貴織。何れも撰む糸遣ひ。

磨き立たる其柄は。「苦辛切瑳の光りなり。
 光る羽二重、白摺瀨。清淨無垢の其品は。氣
 品も高き富士の山。雪を欺く如くよて。高尚
 優美は論もなし。禮服用には是非共に。「欠
 くべからざる物ぞかし。されば特別に。
 美風上品織立て。備ふる店のののののの
 印しを目標しに。織出す分は其丈も。「六丈
 二尺の永尺物。何故長尺織置くや。されば染
 ては幾分か。縮む傾きある故に。夫れ等の点
 に注意して。取計ひし深切ぞ。「ナ、成程感服
 至極。然り然り夫れ然り。然らば即ちのののの
 御召、羽二重始めとし。品數多き雜種類。何
 んでもうんでも信用し。ならではならぬ
 どて。ドシ、買込み賜ふよと。「眞に各位
 の大急務

縫摸様表地石持之類

縮緬振袖惣摸様	八圓五十錢前後迄
縮緬一ツ身摸様	十四圓位迄
縮緬一ツ身摸様	十一圓前後迄
縮緬一ツ身摸様	十五圓位迄

全上留袖惣摸様	十四圓位迄
全上振袖曙摸様	六圓前後迄
全上留袖曙摸様	九圓前後迄
全八掛付曙摸様	五圓前後迄
全八掛付裏摸様	八圓五十錢位迄
全八掛付裏摸様	六圓五十錢位迄
全振八掛雨用摸様	七圓前後迄
紋絹八掛摸様	四圓五十錢位迄
奉書八掛摸様	七圓前後迄
奉書無地八掛三ツ石持	四圓五十錢位迄
縮緬一ツ身摸様	三圓前後迄
紋絹一ツ身摸様	二圓五十錢位迄
縮緬一ツ身摸様	二圓五十錢位迄
縮緬一ツ身摸様	一圓五十錢位迄
縮緬一ツ身摸様	二圓五十錢位迄
縮緬一ツ身摸様	四圓五十錢位迄
縮緬一ツ身摸様	六圓五十錢位迄

縮緬羽折両用石持	四圓五十錢位迄
壹尺巾別織廣巾小巾石持	七圓五十錢位迄
全無地八掛付石持	五圓七八十錢位迄
縮緬小紋石持	五圓前後位迄
全四丈物八掛付	八圓前後位迄
奉書羽折兩用石持	四圓位迄
別織廣巾九寸奉書石持	二圓二十錢位迄
斜子羽折兩用石持	四圓位迄
紋絹全石持	二圓四五十錢
糸好絹全石持	一圓六十錢位迄
小節絹全石持	一圓四十錢位迄
羽二重全石持	五圓位迄

摸樣山々詠れば。見渡す限り清香を。放つ梅花や或は又。節操替らね吳竹や。「色も常盤の十八公。千年万年鶴龜や。目出度くの蓬萊山。又は貽蕩春風の。吹ける稍に爛熳と。咲出したる敷島の。「大和心の櫻花。或は戦ぐ秋れ風。龍田の姫の織なせし。錦とまおふ楓葉の。丹き心を縫ひ籠めし。品は \square ならであし。「見よや人々買へや人。買へや人々小紋縮緬。今年ハ別して壺染に。工風を加えて染たれば。亂り剥脱褪色の。患もあくて其上に。色味も光澤も十分に。柄も新形彫らせたり。「高雅粹麗は御好次第。其他縮緬石持類。奉書紬の石持ハ。別誂に巾廣く。織立てたるもありければ。巾狭なりと唧つなる。方は御用ひあられたし。斯く迄心を盡せる



か。健氣なものやと諸共に。厚き愛顧を垂れ賜ふ。「眞に満足慶賀の至り。

欣舞々々々々
愉快々々

*** ますき 寄せ ***

●改正條約實施の準備と
今後の製造商業

日英條約改正成り其實施の日より英國の領事裁判權は撤去さるゝことなるが之に先立ちて日本政府は議定書第三により工業所有權及版權の保護に關する列國同盟條約に加入するの義務あるが故に此事は條約實施準備の一と爲て之を行はざるべからざること無論にして若し其事行はるゝ上は海外に於て專賣特許を得たる工業品及海外に於て版權を得たる圖書等の是迄我國に於て製作され若しくは出版せられあるもの多きも皆是迄の如く行ふとを得ざるに至るべきを以て製造製作所若しくは出版營業者の如きは今後或いは非常の影響を受くるもあるべく是等は今より大に其前途を憂ひ居るといふ

表面塗抹の郵便葉書

を無効と見做すべしとの事は昨年三月逓信省告示第百七號を以て規定せられたれども其の少數文字を塗抹せしものは尙ほ有効として取扱ふの内規ある由蓋し其少數文字の塗抹とは大凡そ何程位なるべきやは大に世人の判斷に困しむ所なりしが當局者の説に據れば其の表面の塗抹殆んど半部に及びたるものハ勿論半部以内と雖も小部分と認め難きものは未納稅第一種郵便物として受取人より倍稅四錢を追徴するものなり故に其塗抹葉書にして先づ通用に差支へなきものは例へば右方住所の書損一行位を墨消せしものと心得べきなり左れと斯る葉書はなるべく差出さるる様注意すべし然らざれば受取人に對し意外の迷惑をかくる事あるべしと云々

信用手形の流通に付て

近來東京手形交換組合は大に手形取引を嚴重にし若し仕拂期日に至り不渡の事ある時ハ直ちに組合各銀行に通知し其手形振出人は組合各銀行の取引を停止せらる事なり交換組合に此規約を設けて未だ二ヶ月ならざるに既に取引停止の通知を受けたるもの六名ありて之れが爲め或る一部は大に迷惑を感じ居れりと云ふが外國の銀行杯には一部の破綻は影響の全体に及ぶを恐れ破産せんとするものある時は務めて之れを救ふべき一般の恐慌を防ぐとなれば交換組合銀行の如きも此際警戒を充分に嚴にするは

より越前七八の品に至ては既に二十錢方の上進を示せしが如し而して商館は海外より注文に依り産地に向て買進めど又賣品の多からざるを注文品の入嵩みたる爲め至急の取引は之に應ずるものさへ少なき程なりと云ふ又此影響はハンカチン地に及ぼしたると見え目下買買は全く皆無の成行を現はせりと

本年七八月の生糸貿易

横濱に於ける七月中の商勢は賣手常に賣急なるも商館恬として顧みざるより價格に差動薄く只々當用口の賣買に留まり即ち細器械最上七百二十弗と七百弗の間を、太器械優等七百弗と六百九十弗の間を、坐繰優等六百五十弗と六百四十二弗半の間を昂低せり先づ以て月中始終平坦にして其取引に活氣と云ふもの更に無く不振の市場なりしに相違なし今爰に其細表を掲ぐ

生糸相場	最高相場		最低相場		平均	前月平均	高低増
	弗	分	弗	分			
細器械最上	七〇〇	七〇	七〇〇	七〇	七〇〇	七〇〇	一〇
太器械優等	七〇〇	六〇	六九〇	六〇	六九五	七〇〇	五
坐繰優等	六五〇	六〇	六四二半	六〇	六四〇	六四〇	四
坐繰普通	六五〇	六〇	六五〇	六〇	六五〇	六五〇	—
折返優等	六五〇	六〇	六五〇	六〇	六五〇	六五〇	—
折返普通	六五〇	六〇	六五〇	六〇	六五〇	六五〇	—
八王子提	六五〇	六〇	六五〇	六〇	六五〇	六五〇	—

外國爲替參着相場	最高相場		最低相場		平均相場	前月平均	高低増
	弗	分	弗	分			
紐約	五〇弗	五〇	五〇弗	五〇	五〇弗	五〇	四分一
倫敦	二志二片八分七	二志八分七	二志二片	二志〇片八分	二志二片	二志〇片八分	八分一
巴里	二法六三參	二法六三參	二法六三參	二法六三參	二法六三參	二法六三參	二參
銀塊	二片四三	二片二一分	二片八分	二片二一分	二片八分	二片二一分	八分一

生糸輸出	前月繰越		入荷		取引濟及直輸	内地積戻	七月三十日在荷
	米船	英船	佛船	加奈能船			
器械系	七、三三	一〇、〇〇	一、二二	一、二二	—	—	八日三十日在荷
坐繰系	五、二四	四、四四	三、三三	三、三三	—	—	六、〇〇
提糸	三、三三	三、三三	三、三三	三、三三	—	—	六、二四
折返系	五、〇〇	一、四一	五、四一	八、〇〇	—	—	一、三三
鐵炮系	二、〇〇	一、〇〇	一、〇〇	一、〇〇	—	—	三、三三
雜系	一、〇〇	一、〇〇	一、〇〇	一、〇〇	—	—	二、二七
合計	三〇、〇〇	四三、三三	一五、三三	一五、三三	—	—	三三、三三

八月の初旬は依然七月の不況を受けしも十三日俄然新九十番の打出に依て活氣を呼び起し諸館の買進み強かりし爲め相場は昂騰も甚だ劇烈を極め意外の邊迄に奔進して米國市場に影響を與へし等其活潑なりし事近年稀なる取引を結了したり故に一時は標準を失ひ太器械優等は八百三十弗を現はせしも手放し兼ね折返普通七百二十弗ありれど同優等は六百八十弗あり坐繰優等は七百四十弗に留まりしなど價格に於て平準を欠くもの多かりしなれど是等相場の不權衡を以て一様に推測すべからず何れも其度合を保ちつゝ進行をたるとるなり尤も細器械は太器械に比較せば商勢の鈍情なりし爲め八百弗迄頭を出せしに過ぎれども全体より云はゞ活氣充溢の市場を表示せり而して二十八日順挫を告げし能く高直を維持し一般の内氣配容易に屈すべくもあらざる景況なりと左の順に依て其成績を見よ

生糸相場	最高相場		最低相場		平均	前月平均	高低
	弗	分	弗	分			
細器械最上	八〇〇	八〇	七五〇	七〇	七五〇	七〇〇	高五
太器械優等	八〇〇	七〇	七五〇	七〇	七五〇	七〇〇	同五
坐繰優等	七五〇	六〇	七〇〇	六〇	七〇〇	六五〇	同五
座繰普通	六五〇	六〇	六〇〇	六〇	六五〇	六〇〇	同五
折返優等	六五〇	六〇	六〇〇	六〇	六五〇	六〇〇	同五
折返普通	六五〇	六〇	六〇〇	六〇	六五〇	六〇〇	同五
提糸	六五〇	六〇	六〇〇	六〇	六五〇	六〇〇	高七半

外國爲替參着相場	最高相場		最低相場		平均相場	前月平均	高低
	弗	分	弗	分			
紐約	五〇弗	五〇	五〇弗	五〇	五〇弗	五〇	高二弗
倫敦	二志三片八分	二志二片	二志二片八分	二志二片	二志二片	二志二片	全八分
巴里	二法六三參	二法六三參	二法六三參	二法六三參	二法六三參	二法六三參	全二參
銀塊	二片四三	二片二一分	二片八分	二片二一分	二片八分	二片二一分	全八分

生糸輸出	前月繰越		入荷		取引濟及直輸	内地積戻	八月三十日在荷
	米船	英船	佛船	加奈能船			
器械系	七、三三	一〇、〇〇	一、二二	一、二二	—	—	八日三十日在荷
坐繰系	五、二四	四、四四	三、三三	三、三三	—	—	六、〇〇
提糸	三、三三	三、三三	三、三三	三、三三	—	—	六、二四
折返系	五、〇〇	一、四一	五、四一	八、〇〇	—	—	一、三三
鐵炮系	二、〇〇	一、〇〇	一、〇〇	一、〇〇	—	—	三、三三
雜系	一、〇〇	一、〇〇	一、〇〇	一、〇〇	—	—	二、二七
合計	三〇、〇〇	四三、三三	一五、三三	一五、三三	—	—	三三、三三

東京日々新聞金融談

月未ながら金融市場は程好く折合ふて別に著しき用途も

なければ出づるとの薄き代はりに入るものば頼と入らず
落附の風情にて氣締り居れるが正貨の兎角流出勝なる折
柄何故に斯る成行を告げしやと云ふに今日迄商業上の資
本は次第に緊縮して軍事上に注ぐが爲めなるべきか換言
すれば生産に供すべき資金の弗々ながら不生産に消費さ
るゝもの多けれど割合に生産的の需要をかりし故に動
かざりしにやあらん例せば紡績糸、棉糸、砂糖等の外國品
より呉服、太物、木綿等の内國品に至る迄當業者は昨年來
の景氣にて非常に仕入れたりしものを開戦以來兎角賣退
きにのみ汲々とし新に仕入を爲さざる爲此賣退きたる資
金の轉廻して銀行に入れば其資金は再び軍資に供せられ
しより商業上にも需要起らず資金にも餘裕を告げず締り
たるまゝ月末に至りしなり

乍去商業上の資金は何時迄も使用せざるものにあらす一
朝先行の見込立つ限りにば誰れも資本を御して商賣に従
事せんと競ふとなれば商業上の資金は引立つとなるべし
況や先行の見込立たざるにもせよ當用の荷物又は用意せ
ざる可からざるが故に早晩今日より以上の需要を見ると
なるべし

海陸戦の大勝利が如何に我が人心を鼓舞せしめたるやは
今更云ふ迄もなきとなれば之れが爲めには商業上にも著
しき關係を及ぼし上景氣と迄には至らざるも是迄手控へ
たりし需要は再び引立つに至らん去月にてさへ二千万圓
計りの輸入品は之ありしやに開けば今日以後は地方の需

要力増進して一層多額の荷物を求むるとなるべし
是に於てか資本の用途は軍事商業の二者に起りて金融は
次第に忙がはしきに至らんか軍事上の需要のみにてさへ
氣締りなる日歩は商業上にも需要起りたる後に至らば多
少の騰貴は免かれざるとならん日本銀行が兌換券をさへ
増發する上は毫も心配に及ばずとて安心する向もあらん
が同行とても輕輕しく貸出して無限の需用に應ずるとな
かるべし去れば金利は締るとならんか云々

みだれ咲

華紋織評判記

〔頭取〕東西々々、前々から御評判の紋お召の弟分今度新
規に織出しました、華紋織で御座りまするが、皆様御批
評は如何で御座りまする、御腹藏なく仰を願ひます、品
質の見本も價格表も、其處に出して置きましたから、尚
一應御覽下さいまし、是は評判に係りませぬ事ながら、
其見本と同様な品が何時でも備へて御座りまする、御注
文の節は其番號で申込を願ひます〔無駄口〕うれでは已も
百反斗買て新橋敷寄屋町邊の女の子に、一反宛呉れて遣
るべし〔悪口〕生意氣な御大層を申上るな〔理窟〕是は怪し

からん、批評の席で喧嘩口論は止して貰ひたい、互に敵
意を挟むやうでは、兎ても公平無私な評は出来ません
〔最負〕御尤々々、然し十目の視る處十指の指す處だ、恐
らく天下に華紋織の上に出する物は無からうて、喃御隱
居〔隱居〕否、兎角お前方は流行といふと、やんやつと騒が
つしやる氣が知れぬ、一時は赤い物や肉色とか、時花で
猫も杓子も着たものだがついに二年と續かぬ、一樂なぞ
も着ねば、人交りがならぬやうに言たが、今では又紋御
召斗じや、是も違ふらす替が出るも共に跡を絶つ、何と
言ても昔さ、はて浮世は走馬燈廻れば以前へ戻る、近い
証據が野暮たの、古風だのと、手にも取らなかつた物を
珍重仕出す、夫が何故と問へば、つまり物が良いからだ、
あの紅染を見ても知れる、昔は俚歌にも唱つたが、昔馴染
と紅花染は、色が褪めても黄が残るつて、今のを見さ
つしやい水の一滴でもかゝるの古くでもなれば嫌に黒く
なる〔最負〕待たつしやい御隱居、黙て聞けば言ひ度ひ儘
な事を、やわ時花に宜いものはないの、迄たの轉んだの
と、二ツ目には已が若い頃を持出さつしやるが、品物を
見て評判をなさし〔沈着〕はて老人を相手に青筋を立てる事
もなす〔無駄〕面白く、東シ最負満、西シ元山、
あはッ、〔頭取〕東西々々お辭かになさいまして、戯談
ぬきの御評判を願ひます〔無駄〕已ア骨抜の綱の方がい、
〔娘〕此人は食意地が張て居るよ〔悪口〕どうせ人間が下司
さ〔頭取〕是はしたり夫をお止め下さいませんと、頭取大

に迷惑を致します、〔最負〕何、一も二もない華紋織の事さ
〔悪口〕いやなに先刻から承て居ると、無性に譽さつしや
るが、何處が宜いと如何故に旨いとかの言葉が、無くては
ちと受取憎い〔理窟〕成程尤な御論だ其處は私が一言致し
ませう〔頭取〕左様々々、其調子でお遣り下さい〔理窟〕先
づ斯うでおすて、〔無駄〕はてぬふうむ〔理窟〕未だ何にも
申せせん〔無駄〕道理で解らぬ〔悪口〕何のよつちやい人面
白くもない〔理窟〕まあお聞なさい、華紋織の特色とする
点は第一如何なる細微な紋でも御座れ鮮明に織上げて毫
も光澤を失はず、至極粹で奇麗でといふ方から溢れて意
氣で高尚な事に至るまで、遠く他品の及ばぬ處で、又前に
御老人が、流行物は直ぐ立消だぞと仰有いましたるが、彼の紋
御召にしろ此華紋織にしろ人飽がするやうな事の無いよ
うといふが第一の目的で、現に先々の見本の序にも述べ
て有りました通りです是は殊更に申さずとも永久世人の
嗜好を離れないか否やは、見ゆる眼を持た人は、一目瞭然
たる事だらうと存じます〔最負〕ひやく、違ひない、其事
〔隱居〕是は老人が誤た、とれ、眼鏡を掛けて篤と見や
う、うむ違ひない〔娘〕御隱居長いでせう、紋御召を上着
にして本品を下着か三枚着にしたひは、米澤や一樂の大
嫌ひ〔最負〕さう來なくて堪るものか男向と紋御召を下着
の華紋織の溢い奴を上着ちよいと意氣な物を召して居ら
つしやいます事ね失禮ですがなぞと袖でも觸られて見
るとじわくとするから嬉しい〔無駄〕嘘と思召さば僕

我輩に一反着せて見玉へか(悪口)へむ首と体が別々に見ゆらア(頭取)じや皆様の評が宜しひ方で御座りますか
な、貴方様のお思召は(沈着)御一同の御評判通り(頭取)
左様なら華紋織と紋御召は服装界での姉妹、番付に致し
ますると東西の大関で御座ります殿方は紋御召を下着の
本品を上着、御婦人は本品を下着の紋御召を上着、双方
相伴ふて参ります事と、いや結構で御座ります、頭取
もこれで安心、さあお茶でも召上て下さいまし(皆々)あ
い

●紋綸子紋羽二重評判記

付都 都 子 の 披 露

(頭取)さて皆様、お序に紋綸子紋羽二重の方も、御評
判を願ふ事に致しませう(悪口)ナニ紋綸子に紋羽二重
だ、イヤ置いて貰はう、全体紋綸子なんてエものはお婆
さんの被布か、お寺様の羽織位にしか成らないものだ
(最負)オット御言葉ではふりませんが、今度新規に織り出
したのはそれとは譯が違ひましよう(無駄)譯が違つて御
幸福、氣が違つたら相馬の殿様だ(頭取)東西々々、又し
ても貴君は横道へ外れて困ります(無駄)それは取者が悪
いからだ(悪口)エイもう癪さねエカ、五月蠅な(娘)はん
どに餘計な口を利く人だよ(頭取)さア、眞面目に御評
判を願ひます(理窟)然らば拙者が辨論を試みようかナオ

ホン抑も(無駄)ヒヤ、(最負)シツ、(理窟)抑も此紋
綸子、まつた紋羽二重など、云ふものは、婦人禮服用地
質として高尚なる染地として實に本品の右に出づるもの
はない二枚着、三枚着として殊に適當なるものである、
此他趣向のあるのは無双羽織とするに宜しく近時老若を
問はず専ら流行の傾きある被布に用ひて尤も適切なるも
のである、近來高尚なる織物は實に大に時好に適し居る
彼の婦人にして書生羽織の様な鄙俗なる好みに代ふるに
此高雅なる本品の被布を以ていたならば其品位の差等
は眞に天地月窟の違ひでありませう只今悪口君の御説
によれば、お婆さんに限つた様に思召す被布かお寺様の
羽織、若し者なら高々下着位にしら成らない様にお話し
ですが然しそれは尋常一様、昔しから在來の物の事で、
今度織り出したのは(最負)待てました(理窟)それとは大
違ひで、所謂る改良の改良たる處、試に見玉へ、紋に大
中小の各種あつて華美もあれは不華もあり、粹なるもあ
れば高尚なるもあつて實にお婆さんやお寺さんの御用の
み務めて居た、昔の綸子や羽二重とは、譯が違ひます、
(無駄)外のドンガラガとドンガラガが違がアムドンガラ
ガ(悪口)あら、高聲で何を云ふか(娘)又二人がませつ
返すよ、もう癪しなさいつてばよう(無駄)ハイ、つて
ばよう(娘)又真似して厭な人だよ(理窟)議長本員の演説
を妨害するものは、どうか議場外へお出し下さい(頭取)
どうか皆さんお静に願ひます(悪口)それでも聞かなかけり

や懲罰委員に附す可し(理窟)其處で今度織出したのは自
から他の品と違ふから強ち在來の物を以て標準にする
事は出来まいと考へます(隱居)成る程それとさうぢやて
なア(悪口)又隱居降参か(無駄)しつかり遣れ、(最負)
イヤ段々理窟君のお説を承て見ると、實に公平正大の御
議論で、本員大に賛成だ、といふ仔細は、決して空論を
吐くのでない、現在茲に証人が居りますねエ、お花さん
(娘)さうですとも妾はかうして羽織にして着て居ますが
糸織や米澤の書生羽織と違つて、どんなに品が好いでし
やう(隱居)ナニお前が着て居る、嘘云はつしやい、それは
紋縮細だらう(無駄)隱居さん何を云ふのだ、是は縮綾さ
(悪口)なアに並の羽二重よ(娘)ホ、ホ、みんな眼の悪い
人斗りだあと、あれは紋が細いからうんなに目に立ちま
せんけども、此間拵へた被布の方はどんなに奇麗だらう
見せてあげたいねエ(無駄)そんなら矢張り紋綸子か(悪
口)よく見ると成る程さうだ此奴は一番失策たわエ
(隱居)それではあれが紋綸子だどエ、はアて器用な物が
出来るのう(最負)どうだ皆恐入たか(皆々)イヤもう重ね
く、取北さ(頭取)それで御評判が済みましたら芽出度く
一つおめて頂さませうやうか、ヨット、皆さん御待ち下さ
います、マメ現品が参りませんから、爰で御評判を願ふ
譯にも、行きませんが、今度、新たに織立て居ります、
都縞子の御披露で御座りますテ、前刻貴君に、一寸都縞
子のつらねを、御覽に入れ置きましたたが、恐れ入ります

が、爰で皆さんの御清聴を煩はして、置きたいですが、
一寸御讀みを願ひませうやうか、(理窟)ヨット合点、僕我
輩も、コロット失念、恐縮至極、處が俳優口調は、最負
君大得意ですから、先生を願ひませうやう(最負)コウ推
薦に預つて、ヤラサはなりますまいかチ、マ、其書
いたものを一寸拜借……………成程コリヤ妙ですなド
ウモ(娘)じやナイガ相溜らん譯でケスナ、イヤ實に嬉
しい(娘)ツカ早く聞かして頂戴な(皆々)然り、早い
事、(最負)然らば幕を開けあげマシヨ、(無駄)口チ
ヨシ、(頭取)シツ、
(最負)聲色
遠からんものは。首も聞け近くは目も
もみやあ縞子。事も愚かやあれあそは。
日本一の京の水に。晒らもあけたる糸乃
艶。其染色は鳥羽玉に。漆も及ばぬ眞黒
々。墨と雪かや照る月と。泥龜ならぬ泥
色に南京縞子や唐縞子とは。同じ日柄の
論ならず。向ふがぢやん、防主なら。
此方は日本魂に。鍛へあけたる日本兵。
強い處は古今無比。二年の間締め通して
も。弓矢八幡ビクともしねエと。ホ、う
け合つて白す。

〔皆々〕イヨ一成田屋―〔頭取〕ドウモ誠に難有御座いました(娘)ホントに御芝居を見る様な心持で面白事頭取さん其都縹子は何時来るンデしやう早く見たいは(悪口)見たい處でなく早く買つて締めたいのでしようドウモ南京だのちやんくだの唐縹子ナンチューものは此時節に締めるナンテ實に不都合極る譯で……………日本帝國の別嬪たるものはよしんば唐朱子を持て居るにシロ濁溝へでも打ツちやつて仕舞ふが良いは(無駄口)悪にも強けりや善にも強いと云ふは今の悪口君の口上ダテドウモ非常な上出来く(頭取)何しろ皆さんが見ぬ先からソツ焦れて下さいますのも日本の元氣で御座い升色々都縹子に就て申上たいと思ひますが何れ爰へ品が参りましてからの事に致しましよ(最負)頭取さんソレシヤ締めましよ(頭取)ソレシヤ皆さん御手を拜借

ヨ一イ シヤンくくく シヤンくくく

● 評判後の評談

〔頭取〕コー御芽出度、締めていたゞいて、殘る處なき、御評判……………頭取大喜びで御座い外、次回に又々、御評判を願す物も、澤々、御坐いますら、其節い又、何分宜しく願います(最負)頭取さん、私も共々喜んだら、轉るんだりの、口ですが、時に、彼朱珍五寸が今度の評判に、出なかつたは、千古の遺憾ですゲスナ(理窟)ツツ

ト其義と、頭取さんに、替つて、我輩が説明を致しましたようよ、實は、朱珍の男帯も、評判の席出てあつたんデス、デスカ、此男帯は、イカナ悪口君も、攻撃する点もないといふ様の次第で、ありましたら、ソイヤ、職場から撤回と、いふ事になつたんデス(最負)アソツデシタカ、何しろ好評大評滿場總起立といふ様な、勢は吾輩御味方黨なる、否公平中正なる連中の、満足する處ですが、併しく、朱珍の男帯に、就ての一言もなかつたならば、我同胞四千萬に對して、評判議員たる、責務を盡さない様で、チトまづいシヤありませんか、是は矢張滿場一致、大評判といふ事を發表せなくては如何にも濟まないシヤ、ありませんか(理窟)イヤ是は如何にも、恐縮々々、最負君の御説は、實に一分の透きもない處です……………ソイヤあう願つたらドウデシヨ一、實は朱珍の男帯に付て、僕が一寸走りがきのものが御坐います、既に評判議會も閉會した事ですから、おれでも評判議事録の尻へ書いて、今回は御勘辨に預からうシヤアリマシカ(最負)ソツ願へば頗る重疊、今度は頭取さんを頼はして、其名文を朗讀願いたいデスナ(頭取)夫れでは理窟君の妙文を、爰で一寸朗讀致しましよ(皆々)謹聽々々(頭取)ヲホン

西陣 新織 朱珍機丈夫帯地之辞
天地の開け初めてより、陰陽上下の區別

あれ、それに連れ行く物とし事として、又自から別なものを、されは奥方の御手には、二子唐棧の觸るゝ事なく、裏長屋の媽が目には、金と眞鍮を分ち得ねは、金剛石もあはれ硝子と云はれなん、實に其身其分に應じて、着る物持つ物も品あれを貴顯紳士、下司下賤、一目にそれと知れざるはなく、玄關に護膜靴脱ぎたるを、路次に住む大工の履物と云ぬ者なれば、停車場乃下等待合に、柄の圓う、曲りたる毛縹子張の洋傘忘れありしとて、かの八字髻いかめしく、マニラ吹かし玉ひし官員様に向ひて、おれは貴君のと尋ぬる白痴もあらじ、さるを知らぬ火の筑紫の産、名を博多と云ふものありて、上は高帽金鎖の殿より、下は俱利伽羅紋々の兄い達、さてハ算盤珠と呪競して。ギリく結着の商人に至るまで、敵手を嫌はず押し渡りて、頻りに區別を搔き亂しながら世に異うも思はれず、新奇を好む人心に飽りれもせで過ぎし事、不思議も亦思まじからずや、さは云へ是も男物には、是を

侵ぐべき良品の、未だ世に出でざりし故と聞かば又是非もなき事なるべし、茲に老舗の、年來之を口惜き事に思ひ、此度新たに意匠を凝らして彼の今迄は女物とのみ、世に思はれし朱珍をもて、男帯を織り出せしに、其高尚にして優美なる、博多の在り觸れて卑しきとは、月と泥鼈の差別あるより、忽ち紳士諸君の喝采を得て、吾もく注文ある程よ、さしも天下の男帯を、獨り引受顔なりし博多は、是が爲めに其の上花客を奪はれて、今は機(旗)を巻ひて降参するか、左なくはわが故郷なる、西の海をさらりく追ひやられんず有様と成りぬ、博多若し心あらば、嗚や朱珍を恨みやすらん、されども久しく男帯てふもの、貴賤の區別を搔き亂したる、其放埒の罪を思へば、自業自得と云はまくののみ、兎も角にもわが織物社會に、かゝる新機の出來たるを、世の殿方の喜悅はさて置き、所謂美術獎勵の爲めにも、大に賀すべき事なるべしと、帯には短く襟には長き、祝辞と

も口條とも付りぬものを、筆にまかせての
くなん

《皆々》大喝采々々々(頭取)音が悪う御座いますから、御
聞き苦しう御座いましたらうが、如何にも文が旨いじや
ありませんか(悪口)博多帯の一件などは、我輩本職より
理窟君の方が、非常に進んでる子(鼠負)何しろ朱珍男帯
万歳デスナ(頭取)ソウ皆さんの御喜びでと真に満足慶賀
の至り欣舞々々々々やらずば、なりませういかネハ
《皆々》アツハ、くくくく

漫 録

●不向といふに付て小僧の大氣焰

藏 番 小 僧

此柄は不向此色味はイケナイ此品は向かない曰く何曰く
何々之は之れ需用者の供給者に對して毎々不相替御託
宣あるの通辭にして決して珍らしくも亦可笑も非ざるな
り詮する處撥にわたられてチントンシャンと鳴るの三味
線と一般隨分需用者のイケナイ向ないといふの撥のあて
方によつては供給者たる三味線の調子は其語り物否其品
物の何たるを論せず倍々旨いものを拵さへ出す譯合にし
て誠に難有嬉しく奉存上次第たるや小僧の弁を俟ずたし
ずて夫れ明かなり夫れ然らば需用者たるものは得々

揚々として不向なるものは不向と斷言し不向なる品物は
賣買上必ず不利益なりと攻撃し去るの言論の自由は特に
需用者專買の權利にして而して又各地の情況に應じて其
向き口に投ずると供給者たるもの、須らく熱心經營すべ
きの大義務たるや論なし
然るに爰に此供給者より最も崇拜し奉る處の需用者膝下
に一言の愚痴否小言否々御忠言を呈せざるの己むを得ざ
るものあり何ぞや曰く一種の舊守的偏頗的の不向なり向
かないなりの一語之なり元より不向なりイケナイなり向
かないなり買はないなりの言論自由は需用者特有の權利
なるには相違なしと雖も然れども無暗矢鱈に此特權を振
廻して彼の供給者の熱心を以て深切を以て調製せし處の
新機軸なる新意匠なる物点に至る迄一概に不向なり向か
ないなりと能くくの推考研究もなさずして御擯斥を蒙
り奉りて數十年來同一徹同一振合の品柄に非ざれば必ず
買はないとの誤託宣を拜受し奉らんか唯に供給者たるも
の不幸たるに止まらずして今日新陳交代優勝劣敗の時
勢に於て實に々々需用者各位の御爲めに成程御尤も至極
と首肯し能はざるの一件なりといはざるべからず然らば
即ち需用者たるものハ一に祖先傳來の品柄のみに心酔固
着せずして時に新を調し奇を和し以て不向なり向かない
なりとの利刀は非常の場合にあらんずんば其抜き放ちを
禁制せざるべからざるなり
然るに爰に一顧客ありて曰く小僧よ汝の論録に對しては

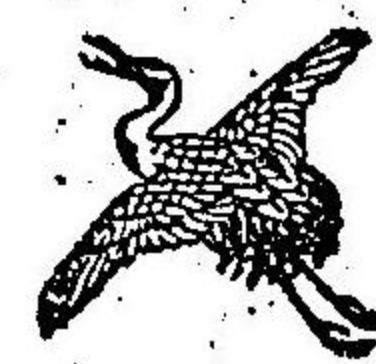
我等も亦幾分の辨解をなさざるべからず假令ば某地の某
豪家に相應なる嫁入支度ありて其調度の需用ありとせん
に其品々の見立をなすものは其家の老父ならずんば老母
にして而して其老人なるものは全く今日の嗜好今日の流
行なるものを知らず爲めに數十年前前自己の婚儀に用ひた
る不粹勿遅の衣装も尙今日に於て粹なりとし優なりとす
るの固陋なる主義を採て以て新規新案なるものは更に顧
ざるの弊は所謂贅履を捨つるが如くならん是に對する
の我々は如何に新意匠新流行なるものを供せんとするも
勢ひ斯の如き井蛙的舊守なる需用者に向つては其説明の
効勞なく隨て新規新案なるものも之を仕込むの勇氣を失
して不知不識廿年卅年前と同一徹の品柄を供して以て得
たりとなすの嘆に畢るを如何せん若し夫れ價格の低廉な
る木綿物の如きに至ては其流行に至る迄の持耐へに處す
るの方策も亦多からんと雖も呉服品に至ては其需用繁劇
ならず其價格又高價にして彼百反干反御茶の子然たるの
木綿物の大手振りの如くなる能はず隨て新流行の清鮮な
る空氣を注入するの遲鈍なる夫れ知るべきのみ故を以て
我輩へ心如何に新規を愛し新案を喜ぶも採算の結果甚だ
妙ならざるを以て新意匠の物点を手當するの樂み甲斐な
く遂に彼の不粹極まれるの舊來の品柄に満足するの傾向
を生ずる之れ人情免れ得べからざるの所にして小僧の所
説は要するに小僧説なりと

ども姑息因循如斯にして何くんぞ改良進歩の實を擧ぐる
事を得ん全体需用者に對する直接供給者たる地位に立て
るの方々にして如斯の引ツ込思案を以て唯に二進が一十
の算盤バチクリ然として甚失敬千萬の申分なりと雖も彼
老蓋なる否偏執極まれるの需用者其御仁に對しては云ふ
タツテだめと妄斷一決徒らに陳套陳腐の物を採て需用
者座右に薦め以て得たるものとし賜ふの弊は彼新流行の
脚步を緩漫遲鈍ならしむるのみならず寧ろ其普及を阻隔
せらるゝものと云はざるべからざるなりと
然りと雖も其土地に習慣あり舊例あり之をしも顧みずし
て騒狂的急激的に都門の流行即ち都門眞向きの品を採
て以て其用途に充てしめんとするの奔逸なる主義は又小
僧の贊辭を呈する能はざる處にして要するに上來陳述せ
るが如く供給者は最も其土地の情況を斟酌して新奇を案
するも所謂竹に木を接ぐの愚をなさずして徐々的に進化
せしむるの方法を講ずべく需用者(即ち其土地に於て)は舊
弊でも何でも之は其地代々相承の風俗なりと固執するの
偏見を脱して向かないなり不向なりの一言一句を以て排
斥嫌厭するなく着々其新味を和して而して東京と地方と
に於けるの其向をして甚しき懸隔ならしむる事を夫れ
勤むべきなりふれ小僧の尤も希望する所にして而して
④の都門流行の新規新案なる品物を漸次に標本として
地方に發送するが如き又此意に外ならずと小僧は信じて
疑はざる處なり

然れど一片の標本にして其現品の一斑を窺ひ易き品柄に於てはあれを適用し得べしと雖も吳服全般に之を應用し得べからず此時に當つては特に愛顧各位の熱心に倚らざるべからざるの順序なる事之れ又最も信じて疑はざる處なり

愛眷各位よ希くば後來其目新らしき品に於て其目覺ましき柄に於て一概に不向なり向かないなりとして擯斥冷遇し賜ふの事實なく勉めて流行注入の媒介に努力し昨日の向は今日の不向となり今日の粹明日の不粹となるが如き新陳交代の頻繁なる世潮に併行して今日の東都流行の品は明日は既に地方に歡迎せらる迄になくとも責ては鉄路縦横交通快便の今日に餘りに迂濶極まれるに非ずやとの嘆なからん事を

嗚呼小僧は已が職分外に突ッ走つて如斯事を書き散らせり生意氣至極なりとの番頭此雷は今や將に小僧頭上に墜ち來らんとす甚以て劍呑せる次第なりと雖も小僧は敢て辭せざるの處元より其覺悟なり唯愛眷各位の其尊嚴を冒して敬を欠けるの罪を寛恕し小僧の熱心は愛すべし小僧の希望は採用せりとの一玉音をだに賜はらば小僧の幸福之に過ぎずして又實に之れ小僧の三拜九拜懇請し奉る處なり



●當世商人虚禮式

好笑齋主人

訪問 (第一圖)

(訪問の番頭衆)「ヨ一且州御機嫌よろしう、いつお登り申した、明日は是非手前共へ御來駕あらんとぞ、冀望致します」

(全)且那明日は是非私共へお出でを
(全)私の方でもお待ち申して居ります、どうか是非御操合せを

(上京の客人)私もやつと昨日來た斗さ、何れ其内伺ひ舛是れは皆さんより頂きものかね、併しカステラに羊羹と來りや、寧ろ有難からずダテ、此通り床の間は恤兵部の受付見た様に、食料品は數閱月の滞陣に差支無しだよ、ハ、ハ、ハ、ハ、是からはどうかわれない、腐らないものに願たいナ、國の土産にも成りさうな物をアハ、ハ、ハ、ハ、

響應 (第二圖)

(響應の番頭)十時だからもう歸らうなどと、のたまふ可らず、夜道には日が昏れませんよ

愉快ぶし 店の門限何ソソ、電燈頭の支配人、小言云ハツガ構ハナイお客の付合口實にソシテ經費ハ交際ノ、費目の内から支出シテ、僕ノ懐中いたまなユイカイユカイ、サツサキタ〜スツチャン〜ベンベコ〜

見送 (第三圖)

(見送りの人々)「大將御機嫌ヨ一左様ナラ」此次はいつ頃御登りで「アバヨ」グウツドバイ、ガヤ〜〜、ドヤ〜〜

(出立の客人)皆さんお揃ひで有難ふ、ハイ左様ナラ

内心

「官員や政黨員ぢやあるまいし、かうガヤ〜大仰に送られちゃア、見得にも上等切符の奮發ト來なけれやならあ、ホンニ難有迷惑トハ此事ダテ 氣笛ビニー

進行の音 ゴツトントント

●文反古

天放子あつめ

巖丈一徹も子故の間

裏の富の茄子も段々と赤らみ参り候と同様の我等身体御同前困り入候

貴老此節は如何御過ごしに御座候や先達ては拙老病氣に付御尋ね被下難有存候何分中風症の事とて抄々敷も無之候へども少し宛は宜しき方に付先々御安堵被下度候

借此度我等存じ寄に付至急御相談願度愚札を以て此段申上候豫而御承知の通り愚息利之助義今年漸く廿三歳と相

成先は拙老も店方切廻しの處同人へ相任せ帳合の摸樣買ひ廻しの振合賣込の工合さては其日の入用位を時々相眺め居候位にて身体は至極閑樂に相成候へども心配りは足の爪の先迄も届きて却て苦しみを増し候様の体裁 貴老も肩に棒千切り暫らくも外さず足に草鞋すれ堪へ間なまといふ程も稼ぐに追付く貧乏なしの働き被成候方々 故心の持方り我等とても同じ事と存居候御同前是迄に仕上げ候に並大低の辛苦にては無之事然るに此節の若いもの事とて兎角に文明とか開化とか小六かしき事斗り申立て老人を捉らまへて天保錢など、冷かし時勢が違ふとか十九世記とやらの人とか二つ目には申立て手は一町も利かぬ癖に口は八町處か十町も廿町も飛つ走り頼と手に掛らざる次第誠に慨はしく存居候處悻悻之助事昨今此風の病と相成最初は至て温當にて我等申事も能く聞き分け身装り掛はず能く稼ぎ候に引替は東京へ仕入に参り候度毎に追々相寡り金時計指輪と見るも胸わるき奢りの沙汰限りなく草鞋壹足に二十里餘りも歩き候我等若年の苦しき断も何時しか忘るて圓蒸氣に腰掛け九徳行き來するを難有とも思はずかまけに結構な上等に乗りて過分との考はなく身体の爲とか今日の資格とか何とか彼とか申立候而風呂敷包すら手に持たず彼カバンとか申す物を提げてマニラとかマヌケとか申す可笑氣なる蓑吸ふなど丸で氣狂ひ染み候様の成行我等存生中は兎にも角にも萬々一の曉には如何なり行くやらと夜の目も寝ず心に配

仕候て奮る者久しからず處か色々申聞かし候も奮らず
と雖も亦久しからずなどと逆らひ候て左ッ張致し方なく
我等若年の御り聞嚙り居候唐様で書く三代目とか申候賣
家の札も此節は二代目と改正相成候ものか心中安から
ず情けなく存居候此程も利之助東京行諸入用の書付一寸
取調候處宿屋なども我等が二百五十文の處を二百文に引
合ひ置候詭計とはコロリと間違ひ大枚一日四百匹からの
拂ひ方如何にも呆れ果候仕合せ右の次第にて只今の内
に何とか所將相付け置かずば我等臨終ととも一家の没
落甚だ氣遣はれ候のみならず實は云ふ事聞かぬ俸はど猶
行末を思ひやりて惘然に被存候愚かしき親心御推量彼下
度付ては貴老の御手許に暫時悻悻御預り被下嚴敷御説得
御追廻し願度元より兄弟同様の貴老の事故我等心底不包
打明け御相談に及び候誠に何かと御苦勞相願ひ恐入候へ
ども悻悻直しの處返すくも宜敷御願申上候番頭久左衛
門より尙御聞取り被下度

御承知の中症にて手も尙々ふるはを我ながらに見悪筆
の跡御判讀願度候恐惶謹言
月 日 石山巖兵衛
榎木金右衛門様

世渡りの綱は一筋の誠

御念書拜見いたし候處御病中より御子息の義に付て懇々
御申越し相成尙久左衛門殿よりも色々承り御心中唯々推

量申上候乍併拙老の様なる五百兩子さへなご身分より見
れば心配も亦樂しみの内と存上候位の成行に付餘りに御
心配なく兎に角御病氣の方御大切に願度候御承知の通り
此節は拙老も同じ東京内とは申しながら邊鄙の處に常住
いたし店方は姪聲金作番頭鉄藏などに先づ相頼み置
き時々摸様相尋ね候位にて勿体なき身分と其日を一日喜
びに送り居り候此程も金作より一寸利之助様事に付き承
り是非一度御目にかゝり候て御晰しも申度存居候處行違
に斗り相成居り御目にも掛らず誠に残念に存居候事に付
利之助様義は吳々も御心配御無用兎に存拙老方へ御遣し
次第篤と御意見も可申又我等昔し嘶も懇々御聞かせ可申
候御述懐の通り我等も追々潰し物の仲間入りと相成舊幕
時代の見本などと笑はれ候様の次第にて成程千里も一時
といふ様なる今日の御時世に生まれし若手より見れば如
何にも舊弊とも頑固とも相見可申か存せず候へども然
し一概に舊弊と笑はれ候我等老人共より若手連中を見れ
ば又々新弊とも横着とも見ゆる人は澤山に御座候全体我
等無學文盲にて六かしき事は更に心得申さず候へども畏
れ多けれど

禁裏様の尊とさも御國の大切なるも心片時も忘れず忠孝
人道を外さぬ様と心掛居候て日々渡世も致し居候へば
御得意様に向ふても應分の御口鏡いたゞく外に誠らしき
嘘も付かず深切らしく人に飾らず幾千万年睦まじき御取
引を願ひたしと思へば白々しき御もてなしも致さず唯誠

釋便の御沙汰に願度不取敢御返事旁得貴意候謹言

月 日 榎木金右衛門

石山巖兵衛様

◎此往覆の書札を見るにどある地方の昔し堅氣の老人
より東京にある年來入魂の老友に其俸を托するもの
と見たり地方の堅氣老人丈に慈悲の塊される様丈
一徹其人の様思ひ遣られて托せられし老友の居を東
京に占むる故か其返しの文面の一趣味あるも又其人
を見るの心地ぞする
あはれ一片の古手紙も心して見れば又誰やらの
蟹をみて氣のつく
そはの清水かな
とやらんいふ句も思ひ出されけり

の心を以て御相手致候ばかりに御座候付てと大切なる御
客を「だし」に御茶屋に遊ぶ人々又は心にもなき淺臺なる
御送り迎ひをなさるゝ方々を見れば誠に情けなき有様と
存候て是が此節申す止むを得ざる交際とか申すものかさ
りては水臭き御付合ひ振りと愚老はなげかはしく残念
に存居候箇様なる世の有様故利之助様御上京の度毎に遂
々御申越の様なる御身持にも相成候事かと察し上候併し
ながら何分昔しならば切支丹とも申すべき様の電信機と
る電氣燈などいふ様なるものも出来候様の世の中の事に
て候へば我等弱年比の事ばかりを申立居候事もならず能
々勘辨あるべき事と存上候元より今の事にても悪しきと
思ふ事などは取合ふ事は出来不申又随分と玉の中に瓦も
交り居候し錦の裁れに馬糞を包むどか能く人の被申候實
情も御座候向きに付別して當節は本玉か疑ひ玉かを見分
け申さずば相成らず誥り利之助様と此見分け方に御抜か
り御座候爲めに今日の御不首尾も御座候義と拙老は思案
仕居候付ては彌御預り申上候上は此邊に十分の心配り致
候て貴老御安堵の取計ひ可致併しながら前申上候通り當
節の事は何登ッ心掛け無之拙老の事とて不行届万々に候
へども唯々拙老の心積りは如斯に候と申上候迄に御座候
此義は御承知置被下度候

委細の處は久左衛門殿にも申入置候へども返すくも利
之助様一條に付ては餘りに御心配過し無之様なされ度且
又移り替る此世の習ひ様々なる義御勘辨被下候て可成丈



藻 壺 草

高砂小紋三枚着 小波 稿

昨日迄植木屋の入り居たる庭は、築山に泉水に眺を添
 ぬ、水流れ出づる處、石面白く積み疊ねたる奥の方、秋
 を思ひ遣らる、若楓の影に、ばしやくと落つる瀧の音、
 涼風は彼處よりぞ起ると思はれて、茂みに見ゆ透かぬ程
 が尙幽がしく、魚の躍る岸に河骨の花咲きて、主人が捻
 つた趣向の藤橋は、一幅の圖の如く、是を渡りて向ふの
 山の裾に虫の騒る燈籠の火は、ちらちらと動き勝なり。
 東京よりお下りになりし、舊藩主の若殿を上坐に、元家
 老を始めとして列坐の面々、世が世丈に拙者然らばの角
 もなく、打解けての今日の御酒宴、お酌は美女に限れど
 藝妓を侍らさんば御無禮と、藩士の娘の中にも、優れて
 の美色を撰びて茲に十人、思ひくしの衣裳の好み、綺羅
 を飾りて我一の粧ひは、立て並べたる銀燭に映じて、最
 きらびやかに見ゆける。

も崩して、若殿様の御前に是りや何した事と、世事慣れぬ
 娘を前に坐らせて、存知ませんと違拗さすもわれば「憎
 らしい」よと言はすもあり「其憎らしいが余も憎さうで
 もない」や横から出て戯るゝもある程になれば、一坐は
 最早無禮講なり。

若殿もはくくの御機嫌、眼臉を櫻色に遊ばして興がり
 玉ひまが、態で若殿の視線は、彼方の柱の前に年老し男
 に何か言はれて、只はいと聞いて居る女の横顔に注
 められて、凝眸と動かぬを、「はてな」と見て取つたるお
 氣に入り心齋老、昔は茶道今も茶の師匠して暮すが、お
 前へ進んで一禮、恭しく、御無禮ながらお盃を頂戴致
 し度う御坐ります。

言終つて頭を上ぐれば是はしたり、若殿の更に耳にも止
 め玉ひま、矢張彼方を視詰めて、手に持ち玉ふ巻貫の灰
 の、お膝に落ちるにも心着き玉はぬ御様子、心齋「おへ
 ん」と出もせぬ、咳をして「若殿お煙草の火が」。

若君驚きて見返り玉ひまの無き顔で「はつと、心齋も
 「へ」と、と凄ひやうな笑ひを漏らして「お盃、頂戴致
 したう御坐ります。うむ遣るぞ、誰ぞ酌を仕て取らせ
 とお言葉の下、一人の娘が恐るゝ畏まりて、銚子を取
 れば心齋、盃を差出し「おつと散りますさうござら、是と
 結構と、押戴きて一口」お幸さん大層お美しうおなりな
 された、もう幾歳で御座る、問をば娘の文字々々して、
 小聲で何やら口の中、心齋耳を寄せて、何年で御坐る、

當世商人虛禮式の圖



第三圖

陸



第一圖



第二圖

何十七、さて、早ひものじや、人形の口へお菓子遣つてお出なされたのは、遂此間のやうに思ふが、はく自分の年老る事、解らぬて、うむう十七か、と矢鱈の感心、年は二八か二九からぬと謂ふは、今じやな、と、若様、左様では御坐りせまんか、若殿は又「はッ、ハッ」と笑ひ玉ふ、眼と心は彼方へのみ取られて、心齋が何を言ふやら喋るやら、茲一番と向けて見ても、何のれ言葉も無ければ、心齋少し間の抜けるを透さず、「いや早いと申せば、若様の御成人にも驚きました、指を折て見ますると、お別れ申上げましたから、十何年に相成ます彼の時は、未だお少さい事で、随分亂暴に入らつしやいしました故、馬の鞭でいやと言ふ程、此坊主頭を御打ちなされた事、事が御坐りまするが、いやは彼の時は、顔を鉄めるに、若君も思はず失笑し玉ひ、未だ覺て居るか、「へへ、痛い事故中々忘れの致させぬ、」死んだら迷つて出さうだな、と、

此時酌に来て坐つて居たりしお幸も、可笑さに堪へ兼ねてや、銚子を取りに行く風して此處を立てば、若殿聲を響め玉ひて、「心齋、彼處に坐つて居る娘が着て居るのは、一体何と云ふものぢや、」心齋じりく膝を進めて、「あれは小紋縮緬と見へます柄の好みもよい似合では、ふりませんが、シテ着て居るのは誰の娘ぢや、」水野の娘で御坐ります、以前家老として居つた水野のか、若殿又少時は眸を凝し玉ふを、心齋笑ましげに顔を突出し、

「御氣に召ましたり、」さあ容色は兎も角、着衣の品といひ小紋といひ、奇麗で高尚で、澄んで粹な好みぢやな、彼で二三枚方引立てるだらう。名は何とか言つたな、へえ照子と申します、いや着物じや、」是と、小紋縮緬と申します、ふむ照子で小紋縮緬だ、左様で御坐ります、ふむ照子が着て居るのは小紋縮緬だ、左様で御坐ります、ふむ、と首を捻て非常の御感心、御意に叶ひましたら、是へ呼びませうか、」はッ、ハッ、例のお笑ひ、心齋盃を杯洗で清め、若殿へ差上げて振返り、「照子さん一寸お酌を、はい、」と照子は答へて立來り、謹んで酌し參らす姿を、若殿はつがせながら身を斜にすかし見玉ふ風情、一方ならずお心に染みたりと覺し。

「あれ照子様、若殿は此方を東京へ連れて行き度いと仰る、何と參らるゝか、と心齋軽く照子の背を叩けば、若君も是に連れて「何じや照をやら、來ぬら、夫ども己のやうな者とは嫌かな、」戯れ玉ふに照子は俯向きて御返事も申上ず、顔を眞紅にしてそつと竊じやうに若君を覗上れば「何じや照、とッ、ハッ、羞かしがる中が可愛ひ者じや、」

三日の處を延びて今日で若殿の御滞在ハ五日、御到着の夜饗應の酒宴ありし明日より、如何やら御氣色の浮き玉はぬ御容体、何がな子細なくて叶はずと、東京より御隨伴の三太夫、昔ハ此名の下に未だ念を入れて源兼義と

中

名乗りし親爺、頻に眉打擧めて合点の行かざりし處に、今日御機嫌伺ひとして罷出たる心齋を、お膝許近う召されての御密談、彼の坊主いかにも怪しき奴と三太夫早くも目をつけ、悪い事とは知りながら次室に立聞けば、残らず知れし水野の娘照子を懸ひ玉お心の中、さてはと伺ひ聞立つれば、懸て心齋は何をか畏みて立歸る、後に若殿吐息と共に打奏れ玉ひて、「あ、目に付て離れぬはわの小紋縮緬と御言の玉ふ横の額、すつと押開きてをづく、這ひ出、蛙の如くに坐りたる三太夫、頭日は何となうお勝れ遊ばさぬ御容顔、氣遣いしく存じます。」平伏したるまゝ、三太夫め御容顔、若殿の例のお笑ひ、「はッ、三太夫か、三太夫め御容顔、十年が二十年と殊更に言はんでよいわ、始終見る顔、十年が二十年見すとも其方の顔は忘れぬ、余程面白く細工に念の入た顔じゃ。」御密談、恐れ入ります、若殿、今此室へ入らうと致ましますと、目に付て離れぬ小紋縮緬、どか仰有りましたが、彼は何の事で御坐ります。若殿はさよふつとする色をかくして、「う、彼か、」彼に御坐ります。「彼は何だのを、」よく存じて居ります。「その縮緬に小紋を染めたのが有らう、」如何にも御坐ります。「彼の事だ小紋縮緬と云ふのは、中々宜いな、御意に御坐ります。」婦人にはよく似合ふではないか、御意に御坐ります、大紋の付いた父上のお上下や祖母様の御小袖にもあるが實に上

品なものでも昔しから流行廢りのあい日本固有の美術ぢやな、御意に御座ります。「あれを着て居る婦人は品位が立優つていつと氣高く見ゆる様でないか、御意に御座ります。」三太夫は御意に御座りますの一天張、若殿は面白半分愚弄半分、彼は中々宜い其方の娘も着せて遣れ、難有存じます。「いや呉れるとは言はぬぞ、其方が買ふて着せるのだ其方は直ぐ貰ふ事と考へる、」流石の御意に御座りますは出ず、若殿は益乗地何うじや已も持へてはどうであらう、随分お似合遊ばしませう。「で、い、己も着やうか、其方も着ぬか、」はッ、其方が着たら何日ぞや淺草に居た猿芝居の口條遣ひのやうであらう、三太夫頰を膨らして、口の中にふつ、吹きしが懸て胸を反らして屹となり、「若殿、恐れながら三太夫御諫言を申上ります、唯今心齋坊主のお話を承りますれば、近頃奇怪な事共現在東京にては、〇候節から御密談も御座りまする處を、水野風情の娘にお心を寄せられ、三日の滞在と有るお約定を、四日になつても御歸京を御拒みに相成、今朝程も申上りましたよ、御氣分に事寄せられ、日頃の御賢明に似もやらず、什麼なる天魔に魁られ玉ひしかど、三太夫漫悲しく存じます、明日は是ッ非御歸京の途にお着あるやう願はしく存じます、若殿も發憤とし玉ひ、無禮な事を言ふな、己と未だ歸らぬぞと、仰有るにもひるまぬ中々の意氣込「警お手打」と口頭まで出たのを、はい是は今通用せぬと思ひ返して、いや、如何

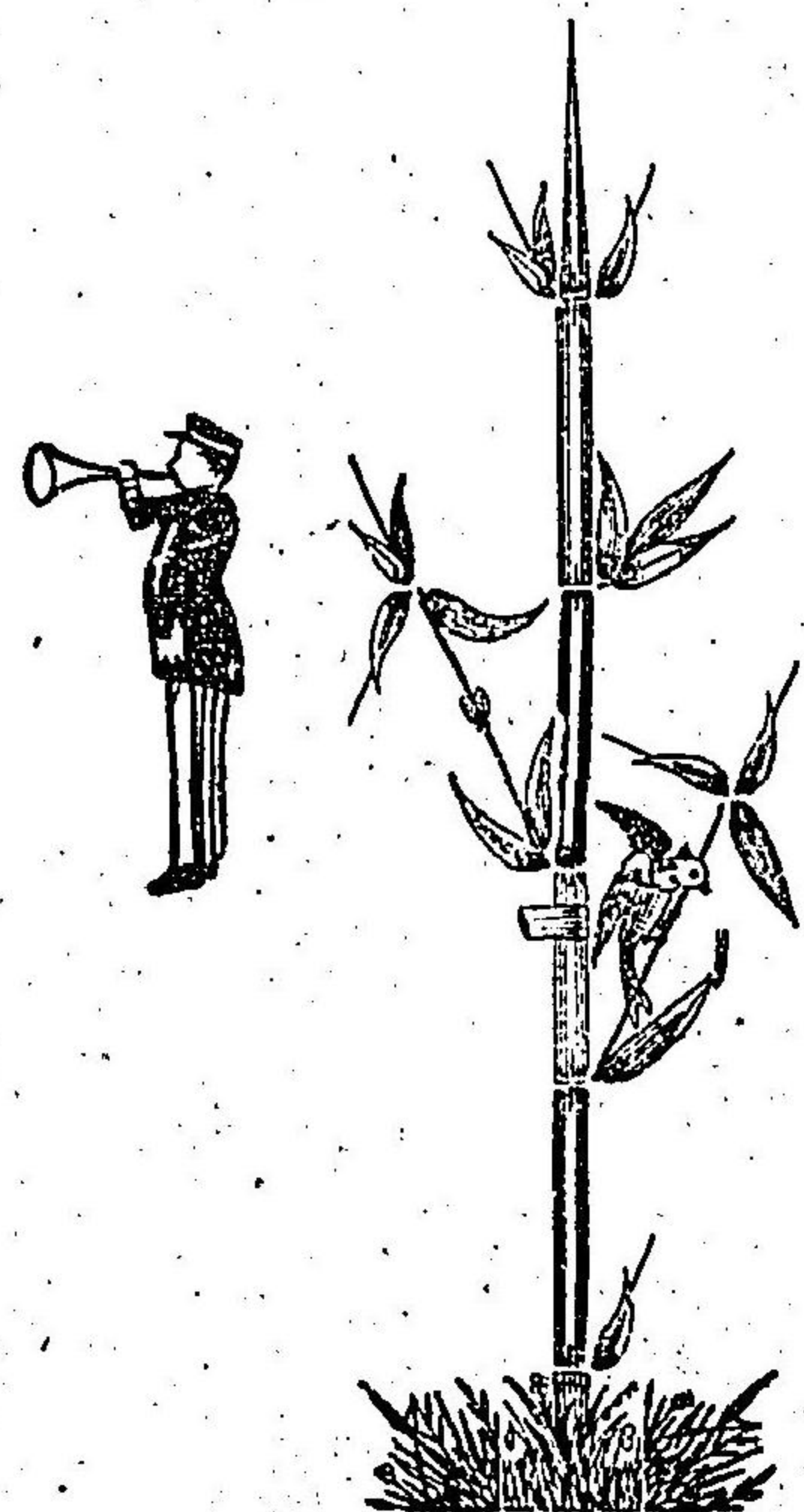
やうに仰有るとも明日は御歸京を、殿様より命を蒙てお伴仕りますから、家臣と申しながらお父君の……五月蠅いわ、「いや五月蠅ても構ひませぬお父君の仰を承つて参りし拙者三太夫、」嘘しいわ「嘘しくとも構ひませぬお父君……」えッ下れ「いつかな下りますます」下れ「若君のお怒、三太夫が剛情、双方の聲高まれば、何事と馳け来る二三の人の有めに、漸く此場は静まりたれど、さて構はれるは、若君明一日はお見合にて其翌日、詮方なく各殘惜しき舊領を後に、恨めしき三太夫に進まぬ心急立られ、後振返り、御歸京の途中也、忘れぬる照子の姿は、臍小紋のおぼろ氣に、目前にぞちらつきける

「何じや東京へ來ぬか、」若君の一言、誠とは知れど身に染みて、眞ぞく嬉しく、下賤の身に勿体なくも慕ひ申せし照子、御歸京の後の悲しさ、兎ても叶はぬ戀と思へば、浮世しみ、可厭になり、寧ろ尼に成つたらと迄、乙女氣の心細り、人知れず袖を濡す心の中、いじらしくも又隣なり。下
 變應のお給仕に出し時の照子が姿、若君のお目にすら止れば、諸士の面々は言はでもの事なり、若きは夫より戀に焦れ老いたるは梓の嫁に、美に集る心は一ツ、早速に水野方へ縁談申込みて、何卒私方へ。「斷つても何某殿へ」と我も、の所望、果は争ひも起りかねまじ

きに、水野夫婦も當惑せしが、其中にも以前は三千石の家柄、今も有福の聞ある信田某、元より別懇の中といひ、是非とも照子様を、と再三再四の懇望、夫婦内心は遣はす事に取極めて、「さて娘か心を」と聞いて見れば照子は抄々敷返事もせず、疊の座を捨てて首を垂れるに、何の羞らう事はない、行くの、と父親喜悅面に溢れて詰倚れば、照子は静かに唇を開きて「お父様のお言葉に背きましますは不孝で御座りますと、妾と信田様へ参るは不厭で御座ります、」何不厭」と父親も、異存なからば村井は何だ、彼家も嫌、本多は宜からう、何好かぬ夫なら伊藤は」と列べ立て、聞いても何れも氣に入らぬに、父も威儀を正して、「お前の行きたしと思ふ方はと問へば、照子は何故か聲をうるませ何方へも参り度ひ處は御座りませぬ、妾は一生葬で……」言ひさしてはるりとする、開いて父は呆れ、「何を馬鹿な、十八並勝れた容色持つて、今嫁らねば盛を過ぎて悔まらうぞ、寡なぞとは何の謔言、よく、物を考へて見ろ、」と子の可愛さに怒を帯びて諭せど何う有つても妾は厭」と思ひ詰めては中々に、昨日も今日も兩親掛りて意見するに、照子は泣いて迄得心せねば、今、流石優しき父も打腹立て、是らや外に虫が有るに相違ない、夫を言へ、親の目を盗んで乳練合つた不義者め」と今も手の竹刀指自慢にする式有つて、様子に依らば世間の娘の戒、我家の名を汚す女重代の

兼光取出して親の手に細首撥落す、とも言ひかねまじき
 権幕、心弱いは母の常とて、先づ此場は妾に任せてと、
 娘と共涙に夫を柔けて「さて」と開き直り「お照、いや
 さ照、其方とニア、照子に取つて、恨めしや、母迄が不
 義したように思ひ定めて、段々との言聞かせ、人と理由
 に依たら、母からお父様へお願ひ申して其男と添はずま
 いものでない又叱られぬ其中に、ちやつと云ふてしま
 や、と看めつ威しつ嫌しつすれど、元より不義の覺ゆな
 き照子其様な事は御座りまん」と此一言より請ふべき詞
 なく、後は唯泣入る斗なるに「未だ剛情な」と父が立上
 る時「表す「郵便」の一聲。
 下女が持ち来るを受取りたる父親「是りや御殿らのお
 手紙と」不審がるに、照子我知らず胸躍らせて、中が早
 う見たく、若しや、と思ふ中に、父は押披ひて讀下
 す顔、次第に笑を潮し來りて「よ喜べ、若殿様お照
 が御意に叶ひ、大殿様御得心にて東京へお呼びよせ、是
 りや夢では無いか、女房「娘」お父様、妾しや、と
 照子ハ又更に嬉し涙「何を泣く不吉々々未だ末に何
 やら書いて有るぞ、何々、仕度として別紙の通り近日此
 方より可差送候間此旨豫て用意可有候尙先日の小紋縮緬
 是非とむ……………先日の小紋縮緬ハテと父親
 は首を傾げば照子ハソレは此前母様が西京にて御誂下さ
 いました小紋縮緬……………ウーンあれかあれの小紋は
 取分け良いな——

さても照子が一念屈して、程無く祝ふ高砂小紋、松の操
 の、常盤小紋、幾千代かけて榮ゆしとはめで度かりけ
 る縁なれ



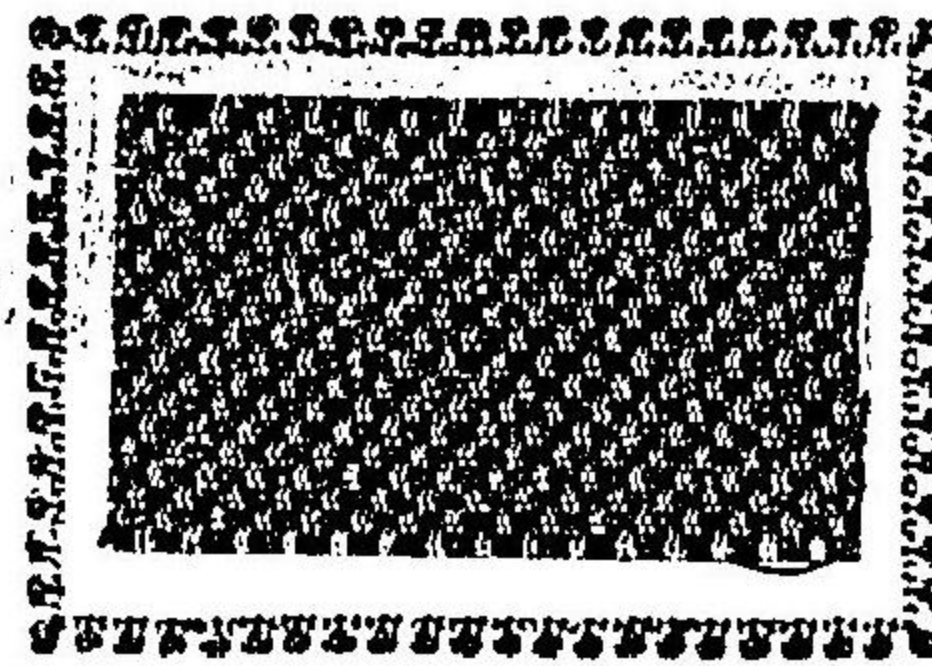
五二會々長前田正名君本誌
 ノ爲ニ特ニ此語ヲ寄セラル
 弊店ノ最モ光榮トスル處

張子
張子
張子

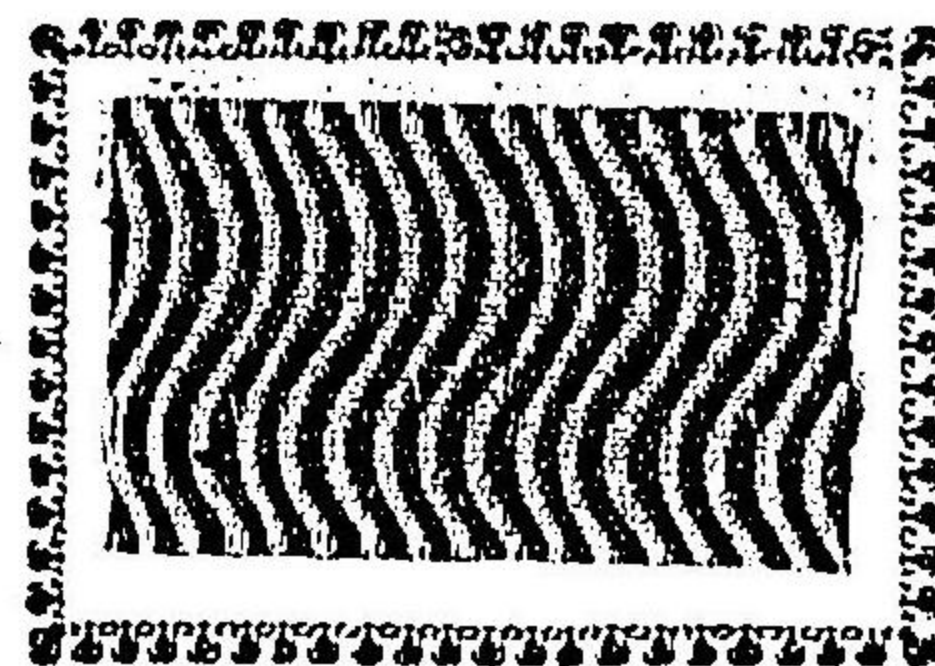
本標召御織紋華

織製陣西都京

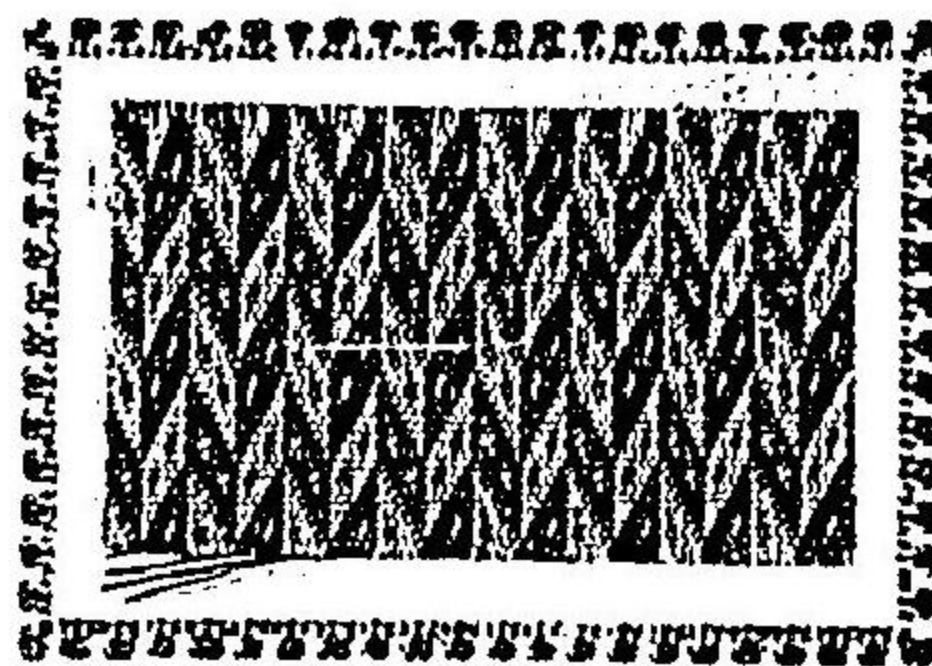
號七拾三



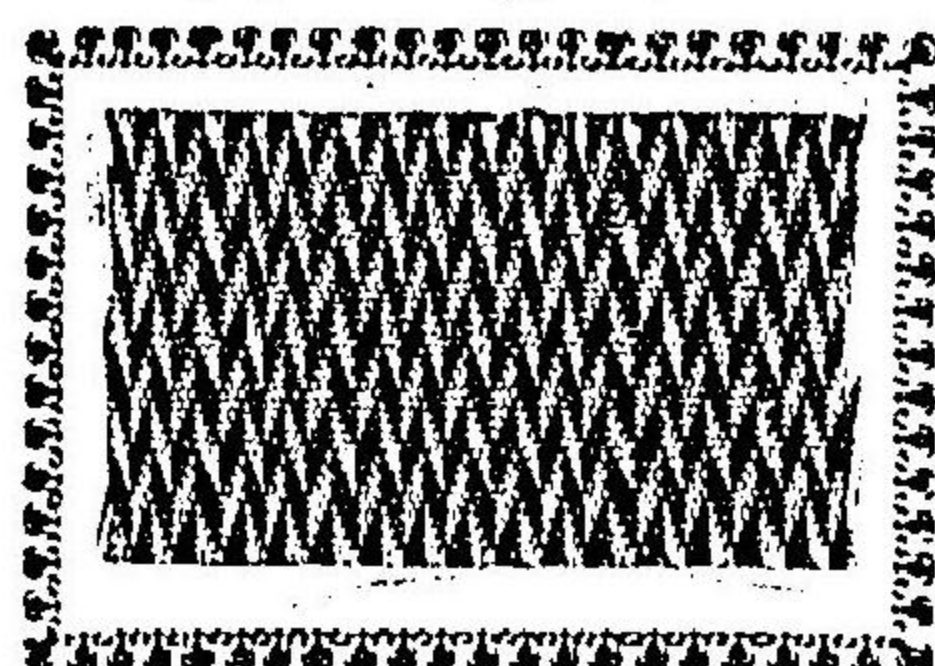
號三拾三



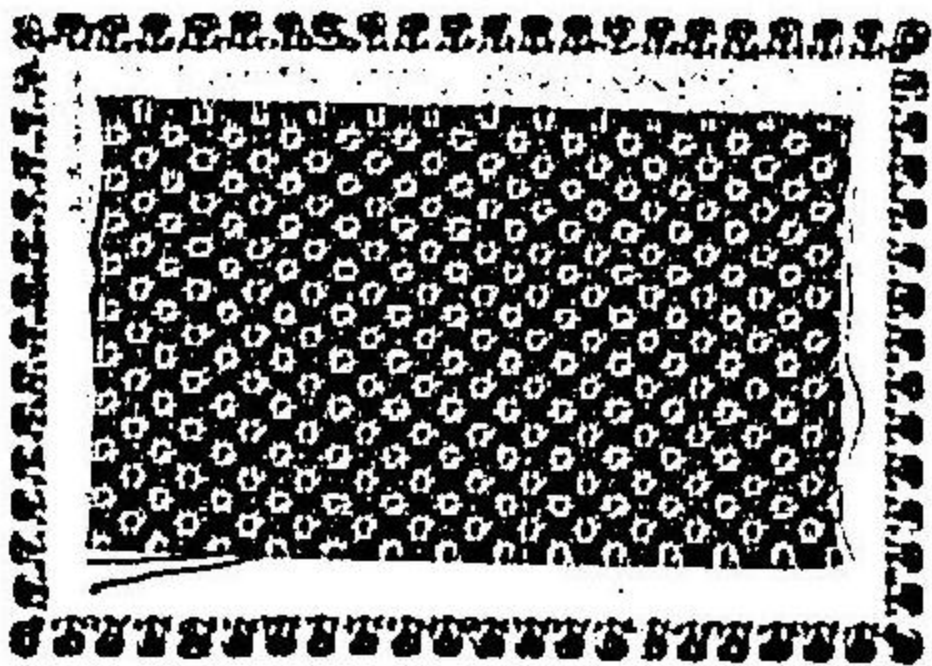
號八拾三



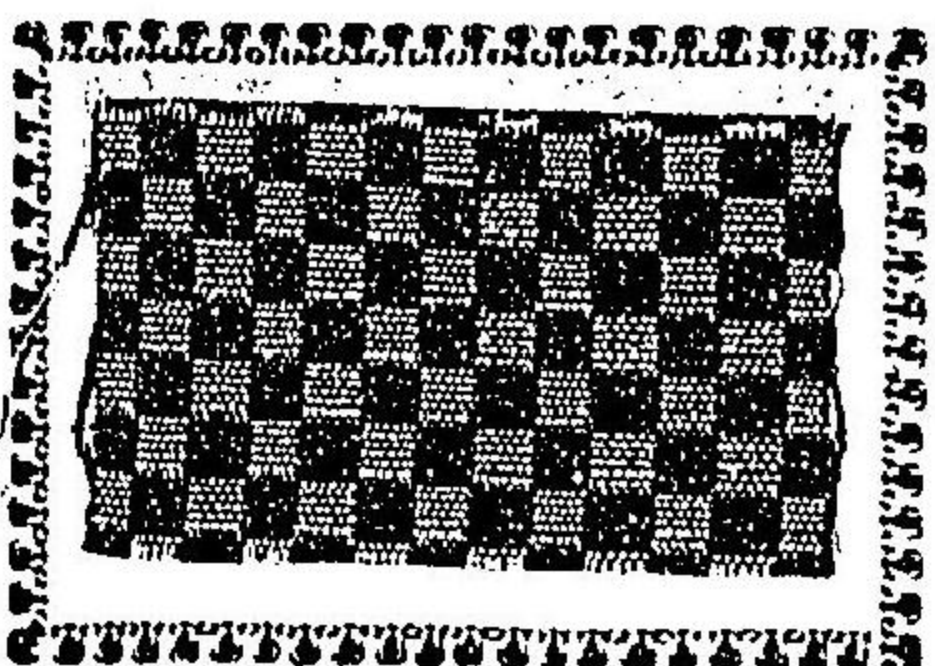
號四拾三



號九拾三



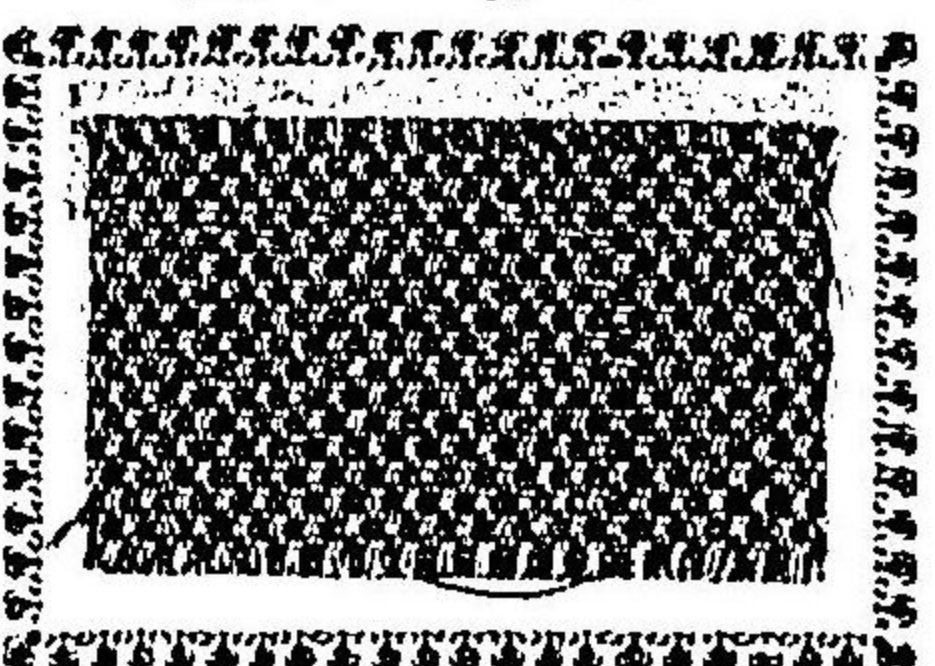
號五拾三



號拾四



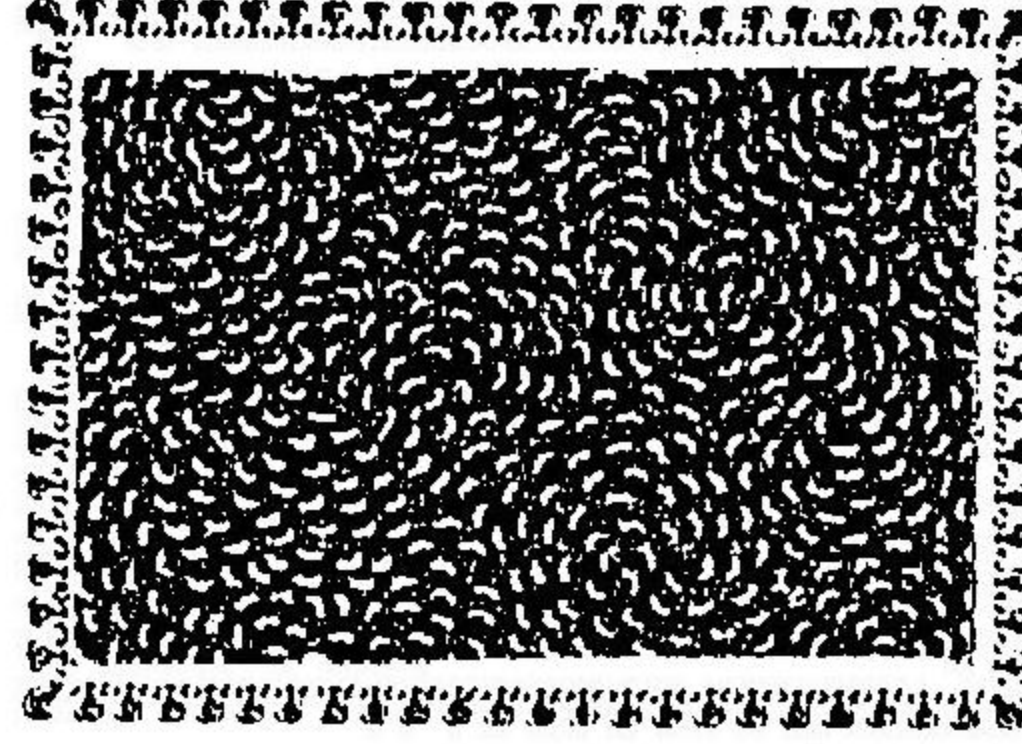
號六拾三



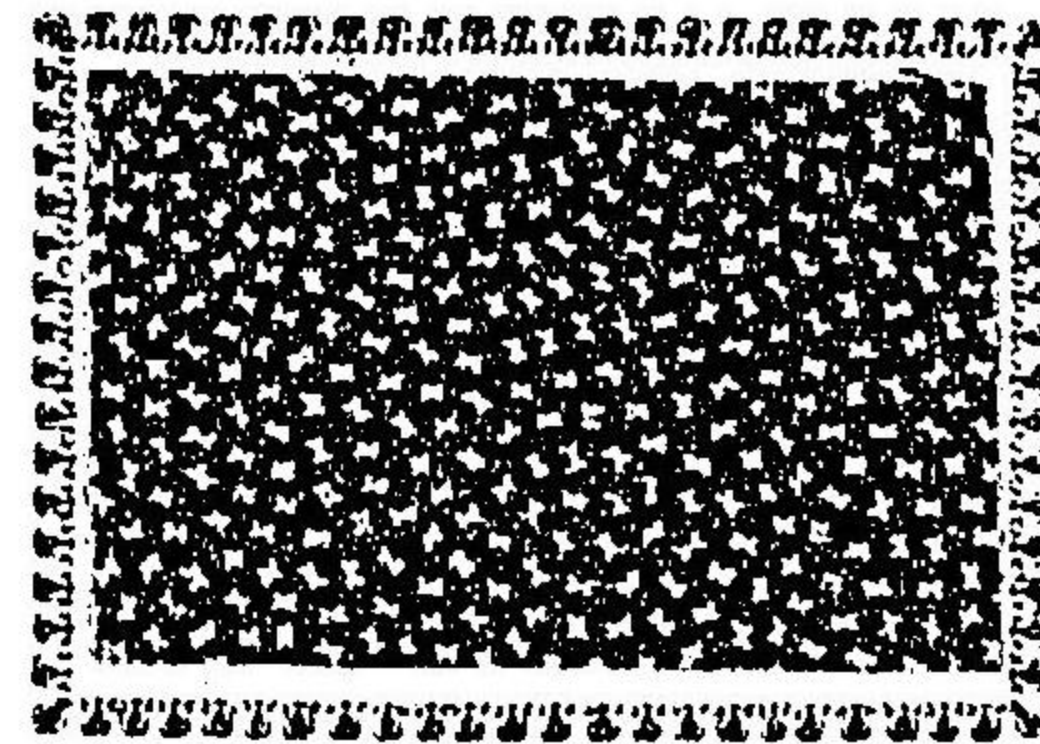
本標形新紋小漆京

備考 此標本ノ地質ハ㊦別機天印 濱縮面三文物練目百匁付

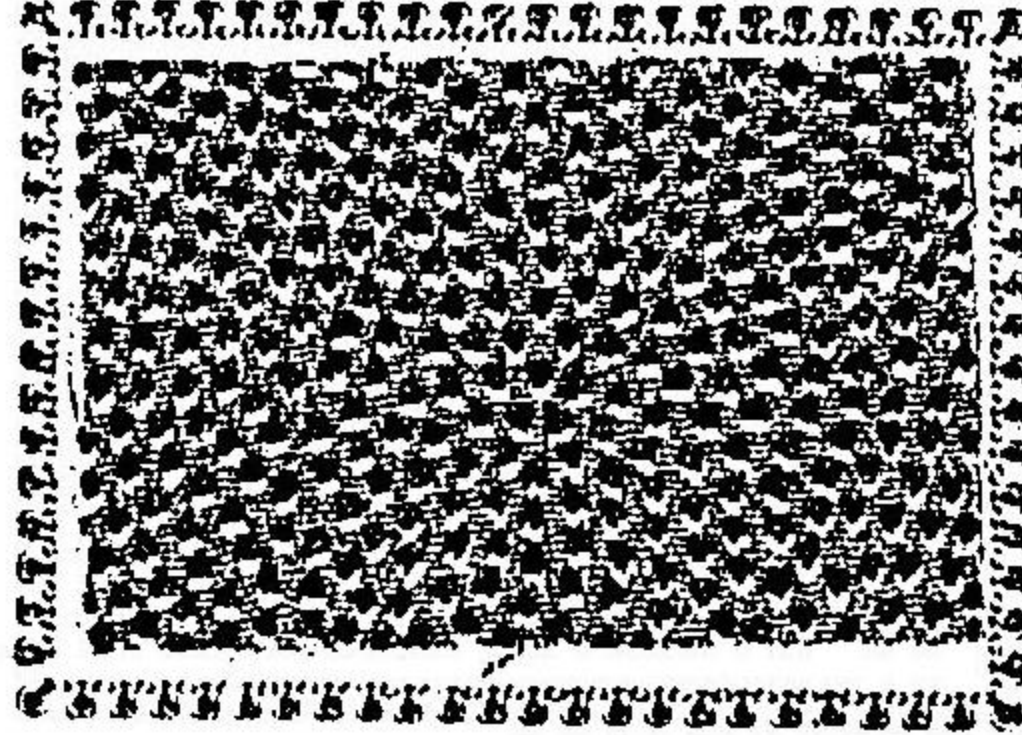
號五拾四



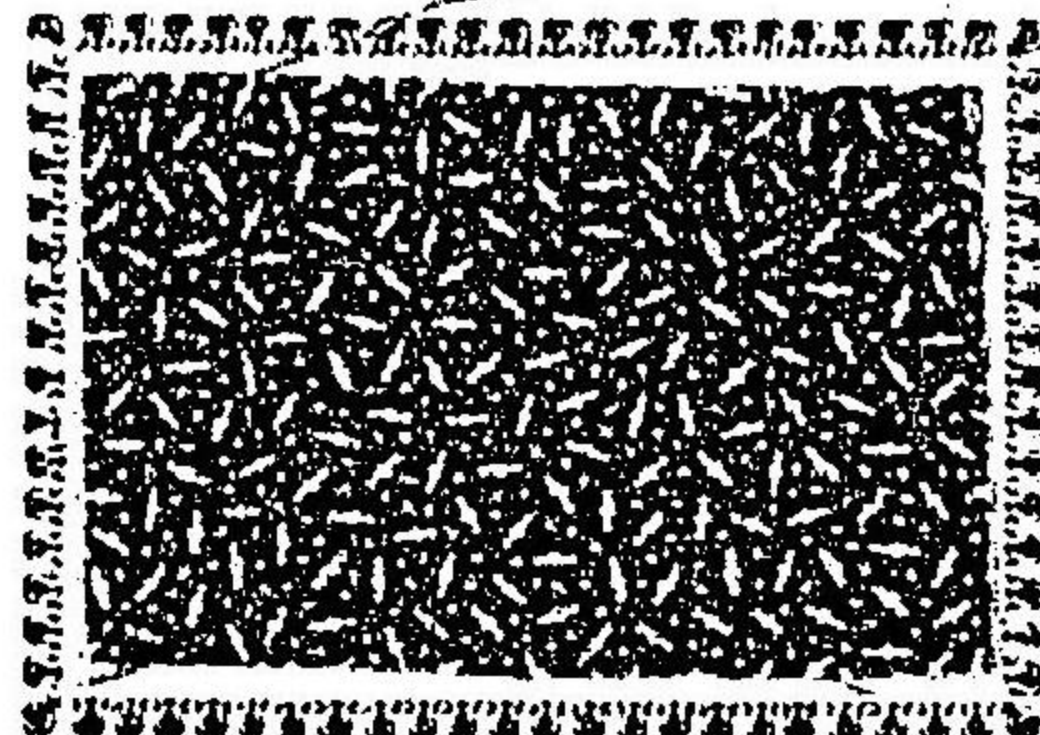
號壹拾四



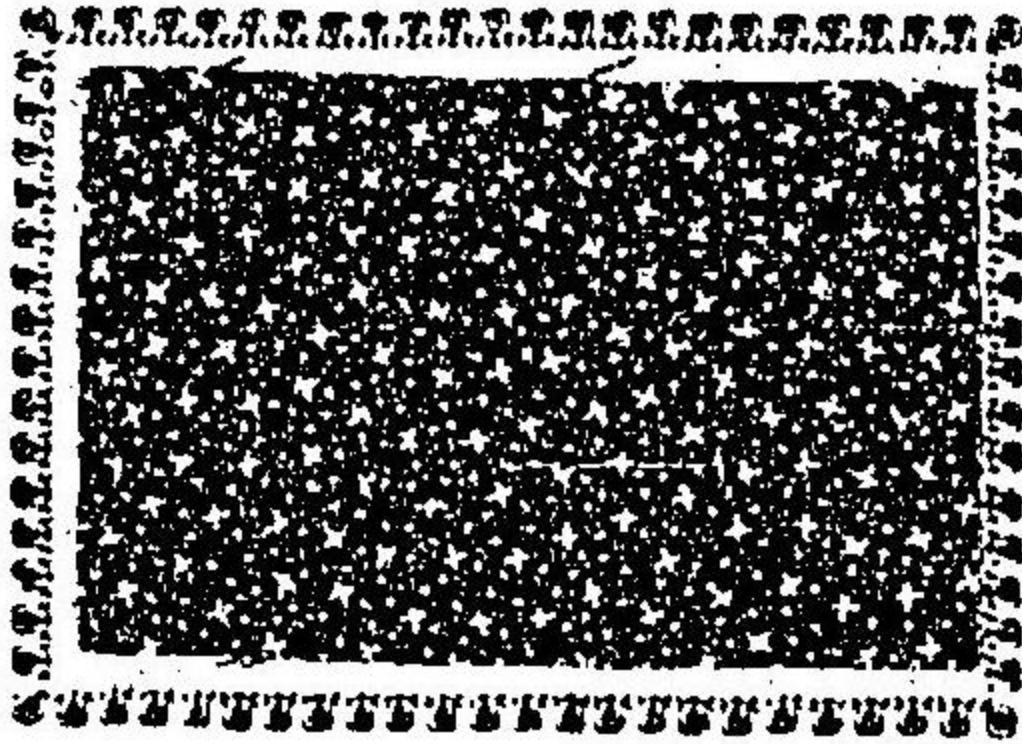
號六拾四



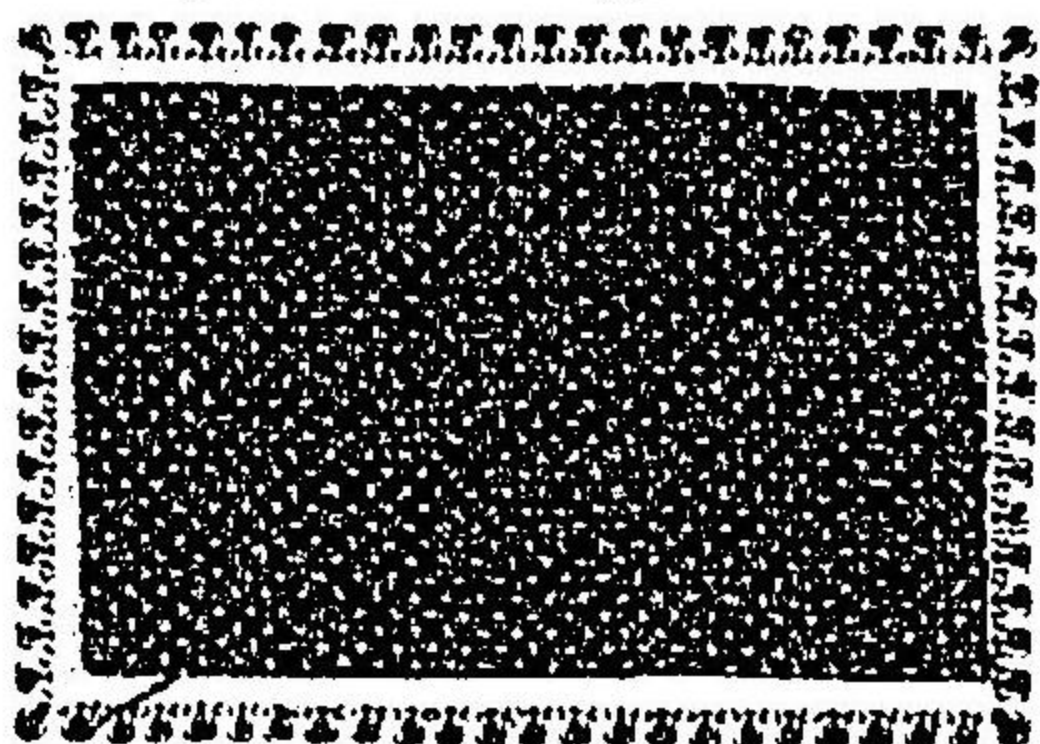
號貳拾四



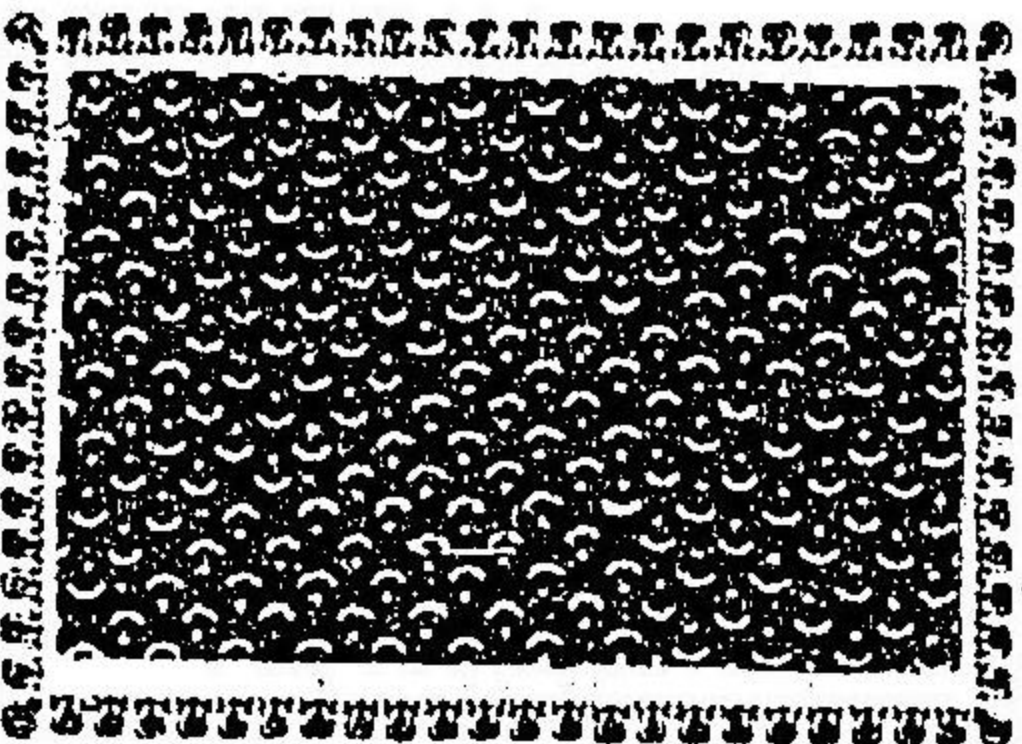
號七拾四



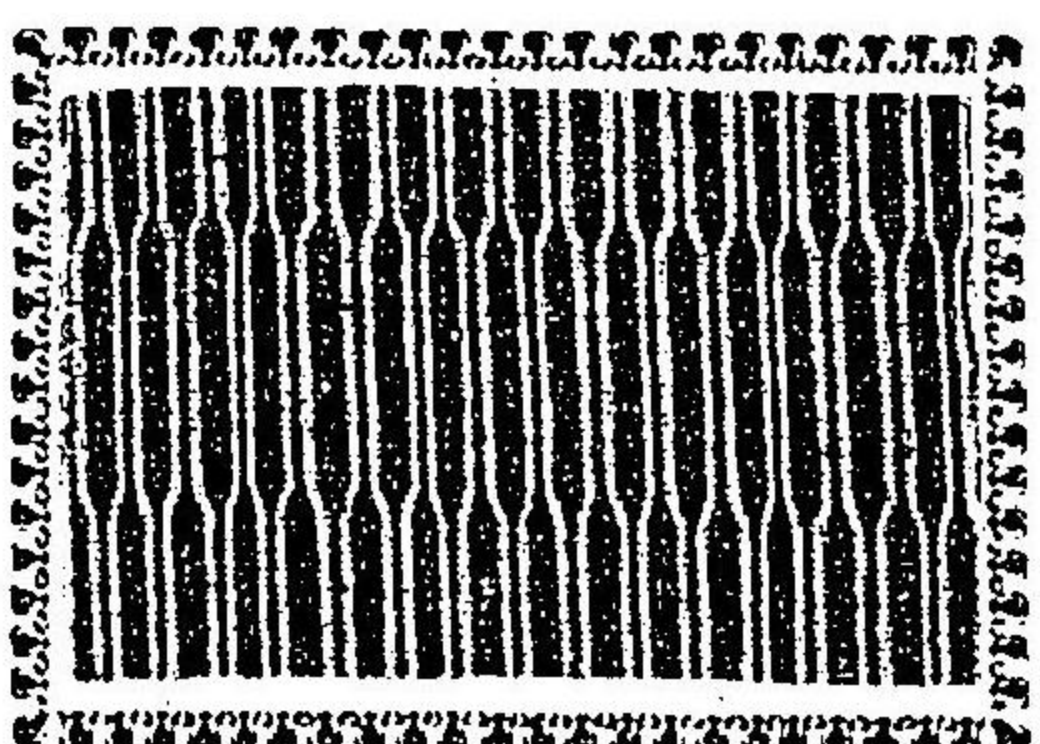
號三拾四



號八拾四



號四拾四



明治二十七年九月三十日印刷
明治二十七年十月十八日發行

東京市日本橋區久松町壹番地

發行兼
編輯人

劍持 定兵衛

印刷人

西 喜三郎

全市全區全町參番地

印刷所

有 文 舍

全市全區全町壹番地

滿天下の諸君に告ぐ

我日本大勝利と同事に開きたる弊舎の石版印刷業も共に大勝利を博しましたるに付尙此上一層勉強致しまして全國の石版印刷物は悉皆有文舎え生捕れました(チガッタ)耀とられましたとの御評判を受度き一心に付他に無類の廉價を以て鮮明な出來いたしますから萬國の諸君も一度御注文下されて感歎の聲諸共々續々御注文を奉希上升

有 文 舍

石版部員一同

謹拜

2V-90

●印刷品種目

書籍 雜誌 教育書類 株券
規則 符號 領收証 名刺
切手 約定書類 商標 デジタル
看板類 紙
其他印刷ニ關スル品一式

●印刷版目

活版 石版 銅版 鉛版
電氣版 木版 亞版 寫真木版
改良銅版 西洋木版之千種也

●製造種目

活字鑄造 銅版彫刻 電氣版製造 罌輪廓製造
インキ製造

◎吳服

商業物價新報
商海之燈臺
商況實報

東京久松町一番地
有文舍

活版部員一同謹拜



廣告

067760-000-9

特55-615

呉服

剣持 定兵衛 / 編

M27

CDK-0051

